

「大目乾連冥間救母變文」訳注（三）

小松謙・井口千雪・大賀晶子・香月玲子・川上萌実・孫琳淨・
玉置奈保子・田村彩子・藤田優子・宮本陽佳

本訳注は、「大目乾連冥間救母變文」について、目にするのできるテキストの全文をあげて異同の全体像を示すとともに、注釈と訳を施したものである。原文については、抄写が行われた当時における用字意識を探るため、本文校訂は行わず、明らかな誤字・略字や修正の跡も含めて、可能な限り原文のまま再現することを目指した。踊り字や周辺に書き込まれた記号も、できる限り原型に近い形で示すことにした。

最も完備したテキストであるS2614を底本とし、他のテキストを並列する形を取る。訳文については、複数の解釈が成り立ちうる場合については仮に一つの訳を附し、注でさまざまな可能性について論じる形を取っている。

本訳注は、京都府立大学において開催している敦煌変文研究会の成果である。今回の訳注作成担当者は、それぞれの担当箇所後に名前を附している通りであるが、本成果は無論、今回の訳注作成担当者以外のメンバーらを含めた研究会における議論の上に成り立つものであり、また彼らは原稿の確認・修正等の作業に従事しているので、全員を共著者とする。

分量が多いため、分割して掲載する。最初の部分は（一）として『京都府立大学学術報告 人文』第七〇号（二〇一八年十二月）に、続く部分を（二）として『和漢語文研究』第一六号（二〇一八年一月）に掲載した。本稿はその第三部分である。これに続く部分については、まず本年度中に『和漢語文研究』第一七号に掲載の予定である。残りについては、来年度の発表を目指している。

【使用テキスト】

今回訳注を作成した部分については、次のテキストを使用した。なお、黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』と対照する際の便宜を考えると、以下本文をあげる際にはテキスト番号と同書における略号を併記する。（一）内に記すのが当該の略号である。なお、杏雨羽071は『校注』では参照されていない。

S2614（原）

P2319（甲）

杏雨羽 071

BD00876（戊）

BD04085 (11)

※近年の動向を鑑み、戊巻と己巻の写本番号については『敦煌變文校注』が依拠する千字文号(盈字76号 麗字85号)から北敦号(BD00876・BD04085)へと改めた。

※北京844も目連救母故事を題材とする変文であるが、文章が全面的に異なるため、本訳注では取り扱わない。

【凡例】

- ・字体は可能な限り原文に従った。
- ・□は欠字。紙が破れているために欠字になったと思われる部分など。
- ・■は判読不能の文字。
- ・×は、他のテキストに存在する本文が、あるテキストにはないことを示す。
- ・はつきり見えないがおそらくその文字であろうと思われる場合には、字の回りに□を附す。例・望
- ・単に字形が似ていることによる誤字と思われる場合は「ママ」記号を附して、注はつけない。
- ・小字は字の周辺(右上・右横・右下)に書き込まれている字である。
- ・小字の「乙」は倒置を示す記号と思われる(日本漢文におけるレ点)。原本では「レ」に見える例も多いが、「乙」に統一する。
- ・字の右横に記される「ト」は誤字を示す記号と思われる(日本におけるみせげち)。
- ・台詞と思われる箇所には「」を入れる。

・韻文部分は全文二字下げとする。

・注の引用文献については、できるだけ近年の校訂を経た刊行物で確認し、初出時に書誌情報を記している。書誌情報を記していないものは、仏典については『大正新脩大藏經』、その他は『文淵閣四庫全書』によっている。

・参照した活字本・校注・辞書類は以下の通りである。

黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』(中華書局 一九九七年)・『校注』と略称

王重民ほか編『敦煌變文集』(人民文学出版社 一九八四年)・『敦煌變文集』と呼称

項楚「『大目乾連冥間救母變文』補校」(『四川大學學報叢刊』第二七輯『古籍整理研究』、一九八五年。のち項楚『敦煌語言文學論集』(上海古籍出版社 二〇一一年)所収)・『項楚校』と略称

項楚『敦煌變文選注(增訂本)』(中華書局 二〇〇六年)・『選注』と略称

蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』(中華書局 一九五九年、上海古籍出版社 一九八一年(増訂本))・『蔣禮鴻』と略称

中村元『廣説仏教語辞典』(東京書籍 二〇〇一年)・『広説』と略称

この他、主として以下の辞典類を参照した。

古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄『仏教大事典』(小学館 一九八八年)

石田瑞麿『例文仏教語大辞典』(小学館 一九九七年)

中村元ほか編『岩波 仏教辞典 第二版』(岩波書店 二〇〇二年)
望月信亨編『望月佛教大辞典』(世界聖典刊行協会 一九五四年)
織田得能編『織田佛教大辞典』(大蔵出版 一九五四年)
江藍生・曹廣順編『唐五代語言詞典』(上海教育出版社 一九九七年)

12

《唱》

S.2614(原): 刀山白骨乱縦横、劍樹頭人千万顆。欲得不攀刀山者、
P.2319(甲): 刀山白骨乱縦横、劍樹人頭千万顆。欲得不攀刀山者、
杏雨羽071: □□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□

無過寺家填好主。^(一) 檣棧菓木入伽藍、布施種子倍常住。^(四) 阿、你箇
無過寺家填好主。 檣挿菓木入伽藍、布施種子倍常住。 × 你箇

□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□

罪人不可説。^(五) 累劫受訛度恒沙、從佛涅槃^(六)仍未出。^(七) 此獄東西數百里、

罪人不可説。 累劫受罪度恒沙、×××××××× ××××××××

□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□

罪人乱走肩相^(八)。業風吹火向前燒、獄卒杷杈從後挿。^(九) 身手應時^(一〇)

×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××

□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□

如瓦碎、手足當時如粉沫。^(一一) 沸鐵騰光向口^(一二)、着者左穿如右穴。^(一三) 銅鑪^(一四)

××× ××××××× ×××××××× ×××××××× 銅×

□□□ □□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□

箭傍飛射眼睛、××劍輪直下空中割。為言千載不為人、鐵杷樓聚^(一五)

箭傍飛射眼睛、刀山劍樹直下××割。唯言千載不為人、鐵杷樓聚

□□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□□ 鐵杷樓聚

還交活。

還交活。 云、

還交活。

【現代語訳】

刀山には白骨が縦横無尽に散乱し、劍樹には人間の首が一千一万个(刺さっています)。刀山に登らずに済むよう望む者は、寺に良い土を敷き詰めるがよろしい。果樹を植えて接ぎ木して伽藍に納め、種を寄進して寺の財を増やすのです。(地獄絵の罪人を指さしながら?) ああ、おぬしのような罪人には(善のなんたるかを) 言葉や説法では説き尽くせぬ。ながの年月罪の責め苦を受ければ(仏の説法により) 恒沙の如き多数の衆生が救済されるものだが、(おぬしは説法の恩恵を受けず) 釈迦仏が亡くなる時にも依然として解脱することはできぬのじゃ。この地獄は東から西まで数百里もあり、罪人が入り乱れて走り肩を並べ合せて(ひしめいて) おります。業風が火を煽り前から焼いて来

て、獄卒が刺叉を持って後ろから差し挟んで来ます。体と首はすぐさま瓦が碎けるように（ばらばらと）なり、手と足はすぐさま粉や泡のようになり（碎け散り）ます。沸き立った鉄がてらてらと輝き（それを）口やおでこに向け、触れれば左の穴から右の穴へ貫かれます。銅の矢が傍へ飛んで来て目玉を射て、劍の輪が真っ直ぐ落ちて来て空中で（体を）真つ二つに割きます。思うに千年経っても人間にはなれますまい、鉄の熊手で掻き集めてまた生き返らせるのですから。

【注】

(一) 刀山…刀山は地獄の責め苦の一つで、仏典に多く登場する。例えば東晋の佛陀跋陀羅訳『佛説觀佛三昧海經』卷五「觀佛心品第四」には「刀輪地獄者、四面刀山、於衆山間積刀如埽。虛空中有八百萬億極大刀輪、隨次而下猶如雨滂。……是時獄卒頂戴刀輪翳令不現、至罪人所卑言遜辭、「我有利刀能割重病。」罪人歡喜即自念言、「惟此爲快。氣絕命終生刀輪上、如醉象走墮刀山間。」是時四山一時俱合、四種刀山割切其身、不自勝持悶絕而死。獄卒羅刹驅蹙罪人令登刀山。未至山頂刀傷足下乃至于心、畏獄卒故匍匐而上。既至山頂、獄卒手執一切刀樹、撲殺罪人。未死之間鐵狗嚙心。楚毒百端。鐵蟲啖食肉皆都盡。尋復唱活。脚著鐵輪從空而下。一日一夜六十億生六十億死（刀輪地獄は、四方に刀山があり、山々に刀が煉瓦のように積まれている。虚空から八百万億の巨大な刀輪が現れ、後から後から雨が降るように落ちて来る。……この時獄卒が刀輪を受け止め遮って現れないようにさせ、罪人の所へ行つて恭しく謙遜の言葉を言う、「私は鋭い刀を持っており

重病を治すことができます。」罪人は喜んですぐに自ら思う、「どうか早くそうしてくれ。意識を失い命を終えると刀輪の傍に生まれ、酔った象が走るような迷いの心を持って刀山の間に落ちてしまった。」この時四つの山が同時に合わさり、四種の刀山がその身を切り、持ちこたえられず悶絶して死ぬ。獄卒の羅刹は罪人を駆りたて刀山に登らせる。まだ山頂に着かぬうちに足の裏が傷つき心臓にまで至るが、獄卒を恐れるために這いつくばって登る。山頂に着くと、獄卒が手に一振りの刀樹を持ち、罪人を撃ち殺す。まだ死なぬうちに鉄の犬が心臓に噛みつく。酷刑は多種多様。鉄の虫が齧って肉はすべて無くなる。ついでまた叫んで生き返る。足に鉄の輪をつけて空から落ちる。一昼夜に六十億人が生まれ六十億人が死ぬ」とある。

(二) 填好土…直訳は「良い土を詰める」。続く句に果樹や種を寄進するよう勧める文句があることから、それを栽培するための肥えた土を寄進するよう聴衆に勧める言葉と解釈される（敦煌は砂漠地帯に位置し、果物の栽培に適した沃土が貴重であったものと推定される）。或いは、壇場（祭場）を築くための良質な土を寄進するよう勧める言葉と解釈することも可能である。仏典において、いばら・とげ・骨・石・瓦礫などが混じった「惡土」と、不純物の混じっていない「好土」を区別する概念はしばしば見られ、壇場を築く際には「惡土」を取り除いて「好土」を敷き詰めるよう説かれる。例えば唐の寶思惟訳『不空罽索陀羅尼自在王呪經』卷下の「若欲作壇先擇星日、若路逢善相選吉祥地。或於河邊或山林處或園苑中。應離荊棘骨石瓦礫高下不平、穢草稠林險惡之地。於其好處除去惡土好土填之、泥塗摩拭平坦如掌（祭壇

を作ろうと思うならまず方角を選び、方角が良ければ吉祥の地を選ぶ。或いは川辺、或いは山林の中、或いは庭園の中である。いばら・とげ・骨・石・瓦礫があったり、高低差があったり、雑草地や密林などの陰しく痩せた地は避けるべきである。その良い場所で悪い土を取り除き良い土を敷き詰め、泥を塗って拭いて掌のように平坦にする」など。

(三) **機接葉木**：S2614(原)は「機接」、P2319(甲)は「機挿」と作る。「機」は「栽(植える)」の俗字(遼の行均撰『龍龕手鏡』(中華書局、高麗版影印、一九八五年)巻四「木部」)、「機」・「機」音災、與栽同、種也)。「葉」は「果(果物)」の俗字(唐の顔元孫撰『干祿字書』(叢書集成初編)、商務印書館、一九三六年)「上聲」)、「葉」・「果」・「果木字、並上俗、下正」。一般的に、果樹の繁殖は、種から植えても同じ品質の果実を収獲することはできないため、良い果実のなる株からの接木や挿木といった方法が採られる。S2614(原)「機接」の「接」(「接」に通ずる)は接木(植物の無性繁殖方法の一つ)するの意。「栽接」の語は、やはり花木や果樹の栽培の文脈中に多く用いられており、例えば宋の呉自牧撰『夢粱錄』(浙江人民出版社一九八〇年)巻一八「物産、花之品」に「秋茶、東西馬勝色品頗盛、栽接一本有十色者(秋茶(ツバキ科の花木か)や、東西に合歡花^{ねむのはな}が色とりどりにたいそう盛んに咲いており、栽接して一本に十色の花がついているものもある)」と見える。また、唐代には宮苑の花木・果樹を掌る「栽接使」という官職が置かれており(呂宗力主編『中國歷代官制大辭典(修訂版)』(商務印書館二〇一五年)／『舊唐書』巻一八四「宦官列傳、李輔國」など)、當時「栽接」の語が普及していたものと推定される。P2319(甲)「機挿」

は「植えて挿木する」の意。例えば宋の蘇軾「景純見和、復次韻贈之」詩之二(『蘇軾詩集』(中華書局一九八二年)巻十一)の「老去此身無處著、爲翁栽插萬松岡(年老いたこの身を現す所も無く、翁となって山嶺に一万本の松を栽挿する)」のように、松など挿木で繁殖させる植物の栽培の文脈中に用いられる。

(四) **倍常住**：「倍」は二倍にする・増やすの意。「常住」は寺院の土地や什器の意で、ここでは「寺の財」と意識した。「倍常住」の用例は少ないが、唐の圓照撰『代宗朝贈司空大辨正廣智三藏和上表制集』巻三「三藏和上遺書一首」(西域に生まれ十三歳のとき長安に入った不空三藏(七〇五―七四)の遺書)に「其車牛鄠縣浚南莊并新買地、及御宿川貼得稻地街南菜園、吾並捨留當院文殊閣下道場、轉念師僧永充糧。用香油炭火等供養、並不得出院破用、外人一切不得遮闌及有侵奪。其祥谷紫(井口注：喜安三年刊大谷大学藏本には「紫」と異本注記がある)莊將倍常住、其莊文契並付寺家(牛車や鄠県の浚水の南の莊園と新しく買った土地、及び御宿川沿いの田地と街の南にある菜園を、私はすべて当院の文殊閣下道場に捨留(喜捨の意か)し、師や僧が永遠に糧食に充てられるよう願う。香油や炭火などの供物を用いるに、決して院から出して消費させず、外の人が隠したり奪うことが一切できぬようにせよ。祥谷(地名か)の村の莊園は寺院の財を倍增させるだろう。莊園の売買契約文書は全て寺に付与する)」と見える。

(五) **阿、你箇罪人不可説**：「不可説」は仏典においては梵語 anabhiṅgya の漢訳で、口で説明することのできない、ことばで表現できない、言葉では言いようのない、説き尽くされぬの意であり(『広説』)、「ああ、

おぬしのような罪人には（善のなんたるかを）言葉や説法で説き尽くすことはできぬ」の意と解釈される。「你」は変文の聴衆に向けた呼びかけではなく、絵解きに使用する地獄絵に描かれた罪人に対する呼びかけだろう。

（六）累劫受訖度恒沙…「累劫」は仏語で、多数の劫（無限の時間）を重ねること、ながの年月（「広説」）。「受罪」は罪による責め苦を受けること。「度」は「渡」に通じ、梵語 *ni*（導く）・*paritṛāṇa*・*uttarāṇa*（救済・済度）などの漢訳語で、もとは川を渡るの意だが、宗教的には、この苦しみの世界から、かの目覚めの世界へ自己が超越すること、および他者をそのように導き救済することを意味する（『広説』及び『岩波仏教辞典』）。「恒沙」は「恒河沙」（梵語 *Gaṅgā-nadī-vāṇukā*）の省略形で、ガンジス河の砂、転じてガンジス河の砂の数のように数量が多いことを言い、多くは諸仏・菩薩・仏国土の数などが計り知れないことを喩える（『広説』）。入谷義高は本句を「恒沙の劫を経つ罰を受け」と訳すが、『仏教文学集』（平凡社、中国古典文学大系六〇、一九七五年）、原文の文法的構造に即しておらず、また「度」が正確に訳されていないこと、「恒沙」が時間を修飾する言葉として適当かといった問題がある。仏典を見る限り、「度恒沙」は「恒沙の如く多くの衆生を済度する」の意で使われる。例えば宋の智嚴訳『佛說法華三昧經一卷』、「（如来）各各在十方教化、度恒沙等天人民、皆使作佛（如来はあちこちで教化を行い、恒沙の数ほどの天の民や人間界の民を済度し、みな成仏させた）」、『佛徳大通禪師愚中和尚語録』「序」、「嗟乎、過去大通佛、在塵點劫前、轉無數法輪、度恒沙衆生（ああ、

釈迦牟尼仏は、永遠の昔、無数の説法を行い、恒沙の数ほどの衆生を済度した）」など。以上から、「ながの年月罪の責め苦を受ければ（仏が説法により）恒沙の如き多数の衆生を救済するものだが」と訳出した。S2614（原）には「受罪」を「受訖」と書き損じた跡があることから、抄写者をはじめ「（罪の責め苦を）受け終わったら」と解釈していたことがうかがわれる。

（七）従佛涅槃仍未出…「従佛涅槃」の解釈は難解。まず「従」は以下の三通りの解釈が可能。（i）「くから」の意。（ii）介詞「在」「於」と同義。用例は宋の李昉ら撰『太平廣記』（中華書局一九六一年）巻一二「神仙一二、李常在」の「後乃各見死在牀上、二家哀泣、殯埋之。百餘日、弟子従郷縣逢常在。將此二兒俱行（のち「李常在の」弟子二人がそれぞれ床の上で死んでいるのを見て、二人の家の者は泣き悲しみ、棺に入れて埋葬した。百日余り経ち、弟子は郷縣で師の李常在に会った。「李常在は」この二人の子とともに連れて行った）」がある。（iii）徐震堉校「敦煌變文集校記補正」（『華東師大學報・人文科學』一九五八年一期）・「校注」が言うように「縦（たとえ）としても」に通ずるとみなす。「校注」は根拠として、二十世紀の言語学者楊伯峻が、『春秋左氏傳』「宣公二年」の「從其有皮、丹漆若何」句に附した注に「從同縱、讓歩連詞。言縱令有皮、但丹漆難給、將若之何（「從」は「縦」に同じ、讓歩の連詞。たとえば皮があつたとしても、甲冑に塗る朱色の漆は供給し難く、これをどうしようかと、言うのである）」（陽伯峻編『春秋左傳注』（中華書局一九八一年）六五四頁）と言うのを挙げる。次に「佛」は、本変文中では釈迦牟尼仏を指すことが多いが、

梵語 buddha (ブツダ) の音写で、原義は目覚めた人、自ら真理を悟り、他人を悟らせ、悟りの働きが極まり満ちた究極の覚者^{かしら}を広く意味する(『広説』)。「涅槃」は「涅槃」と同義で仏典に多用される。梵語 nirvāṇa の音写で、迷いの火を吹き消した状態、人間の煩惱や穢れがすべて消滅して悟りを開いた状態、仏道修行の最後の境地。或いは生命の火が吹き消された状態、即ち死去・入滅を意味する。

以上を念頭に置いた上で、本句の訳は以下の四通りが考え得る。(i)「釈迦仏が死去する時(にも)、依然として(罪の責め苦から)脱出できない(或いは解脱できない)」。仏典において「佛涅槃」の語は多く釈迦牟尼の入滅、死去を指す。例えば北魏の慧覺ら訳『賢愚經』巻五の「合掌跪向拘尸那城佛涅槃處、自立誓願(合掌してクシナガラ^{クシナガラ}の釈迦牟尼仏が死去した場所に向かつて跪き、自ら誓願を立てた)」、隋の闍那崛多訳『佛本行集經』巻一の「佛涅槃後、正法住世亦三百歲(釈迦牟尼仏が死去した後も、正法〔正しい教法〕は世に三百年間行われる)」など。本来、釈迦の在世中には、その説法の功德によって多数の衆生が済度されるはずであるが、地獄で責め苦を受ける重罪人は、説法の恩恵を受けることもなく、釈迦仏の死の時に至っても、依然として改心せず責め苦を受け続ける、と言うのである。本変文の時制が釈迦仏の存命中であることを考慮すると、自然な解釈と言える。(ii)「涅槃仏が死去してから、未だに(罪の責め苦から)脱出できておらぬ(或いは解脱できておらぬ)」。つまり、「佛」を、釈迦以前に現れたとされる六人の仏(毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏・拘留孫仏・拘那含牟尼仏・迦葉仏。釈迦牟尼仏と併せて「過去七仏」の称がある)

の内、最後に現れたとされる迦葉仏と解釈し、その迦葉仏が死去してから、現在の釈迦仏の時代まで、ずっと地獄で苦しみ続けている、と言うのである。仏典にも「佛涅槃」を迦葉仏の死去の意で用いる例がある。例えば東晋期の成立とされる訳者不明『佛說因緣僧護經』に「佛告僧護、……此諸罪人、迦葉佛時、是出家比丘、不依戒律、順己愚情、以僧浴具及諸器物、隨意而用。持律比丘、常教軌則、不順其教。從迦葉佛涅槃以來、受地獄苦、至今不息」(釈迦仏は僧護比丘に話した、……この諸々の罪人は、迦葉仏の時代に、出家した比丘であるが、戒律を守らず、己の心に任せ、僧の水浴み道具や諸々の器物を、好き勝手に使用した。戒律を守る比丘が、いつも規則を教えたが、その教えに従わなかった。迦葉仏が死去して以来、地獄で苦しみを受け、今に至るまで休まることがないのだ)とある。(iii)「弥勒仏が涅槃に入る(真理を悟る、或いは死去する)時(にも)、まだ(罪の責め苦から)脱出することはない(或いは解脱することはない)」。つまり、「佛」を「未來仏(未來に出現する仏)」とりわけ、釈迦の入滅から五十六億七千万年後にこの世に現れ、華林園の龍花樹の下で成仏し、三会の説法によって一切の人・天(人々と神々)を済度するとされる弥勒菩薩と解釈し、それほど遠い未來まで永劫に地獄で苦しみ続ける、と言うのである。弥勒信仰は、中国では北魏時代に始まり、唐代には則天武后が自ら弥勒仏の化身と称したように、盛んに展開した。「佛涅槃」の語が弥勒の涅槃入りを指す用例は見つからないが、「弥勒涅槃」「弥勒菩薩涅槃」の用例であれば、以下のような例がある。隋の達磨笈多訳『大方等大集經菩薩念佛三昧分』巻一〇の「復於彌勒涅槃

後、有佛師子調御師（また弥勒が悟りを開いた後、仏・師子〔獅子即ち仏陀の意〕・調御〔仏十号の一つ〕たる師が現れる）、唐の遁倫撰『瑜伽論記卷第六之上』『論品』卷二一の「釋迦入涅槃後正法五百。像法一千年。彌勒涅槃之後法住於世亦六萬歲（釈迦仏が涅槃に入った後には正法が五百年行われ、像法が千年行われる。弥勒が涅槃に入った後には法は六万年の間世に存する）」など。（iv）用例を挙げるのは難しいが、「仏」を「成仏」（真理に目覚め悟りを開く）の省略形とみなし、「（多くの善男善女が）真理に目覚め涅槃に入る（悟りを開く、或いは死去して解脱する）時（にも）、（罪人は責め苦から）脱出できない（或いは解脱できない）」と解釈する。

ちなみに入矢義高による訳は「仏成道の日さえ苦界を出づること叶わぬ」（『仏教文学集』〔平凡社、中国古典文学大系六〇、一九七五年〕とするが、詳しい解釈が無く、文意が今ひとつ理解し難い。

（八）襷…字形の類似する「綴（連なる）」に通ずるか。「襷」と「綴」を「繕う・つづる」の意で混用する例としては、宋の普濟撰『五燈會元』卷四「盤山積禪師法嗣」の「唐咸通初、將示滅、乃入市謂人曰、「乞我一箇直綴。」人或與披襖、或與布裘、皆不受、振鐸而去（唐の咸通年間の初め、今にも即身仏になりかけ、そこで市中に入って人に言った、「どうか私に一枚の直綴をくれ」と。人は掛け布団を与えたり、綿の衣を与えたりしたが、いずれも受け取らず、鈴を鳴らして去って行った）」のように、僧袍・道袍を指す「直綴」（じきとつ）を、「直綴」と作る用例が多数ある。『校注』は、「綴」字（綴木〔植物名〕や建物うだちの税の意）と翻字した上で、「綴（連なる）」に通ずるとする。その根

拠として宋の林通「寄太白李山人」詩に「身上只衣麤直綴、馬前長帶古偏提（体の上には苔の衣と粗末な直綴、馬前には長帯と古の酒甕）」句を挙げるが、管見の限り、この句には「綴」「綴」字が使われており、「綴」字を使う本は見当たらない。

（九）業風…悪業の報いとして感ずる猛風。劫末の風輪から猛風が起り、第三禪天以下ごとくこの風のために破壊されるという（『広説』）。

（一〇）把…「把」には、さらい（穀物を掻き集める農具）や掻く・ならすの意があるが、ここでは「把」の通字（明の張自烈撰『正字通』（中国工人出版社、清康熙九年序弘文書院刊本影印、一九九六年）辰集中「本部」、「把：通作把」）で、片手で握る、持つ意となる。一般的に、抄本では手偏と木偏は混同される。

（一一）身手…「校注」は用例を挙げていないものの「寫本中「手」「首」通用」として「身首（体と首）」と解釈する。本訳注もこれに従う。

（一二）應時…S264（原はもと「應時（ただちに）」と作り、「時」の右に小字で「是」を書いて「應是（すべて）」としている（但し「時」を墨で消しているわけではない）。項楚校・「校注」の言うように、下の句の「當時（ただちに）」と対となる「應時」の方が適当と思われる。『校注』はさらに「寫本中亦往往有原字不誤而旁注字誤的情況、此亦其例（写本には往往にして元の字が間違っておらず傍注の字が間違っている情況があり、これもまたその例である）」と言う。

（一三）粉沫…字面通りに「粉や泡」と訳出したが、「粉沫」の用例は他に見つからず、『校注』のように「粉末（粉くず）」に通ずるとみな

す解釈もあり得る。

(二四)向口圓:「傾」について、後漢の許慎撰『說文解字』は「傾:出額也、從頁佳聲」、即ち突き出た額(おでこ)を指すと言う。宋の陳彭年ら撰『廣韻』(『校正宋本廣韻』(藝文印書館一九七〇年) 卷一 上平聲「六脂」は「傾:項傾」(「項頸」の誤か)、即ち首の後ろを指すと言う。明の梅膺祚撰『字彙』(「字彙・字彙補」(上海字書出版社、清康熙二十七年靈隱寺刻本影印、一九九一年) 戊集「頁部」は「傾:直追切、音垂、脊骨」、即ち背骨を指すと言う。いずれも「口」とセツトで二音節語を構成するには不相応に思われるが、ここでは『說文解字』に拠り「向口圓」を「口やおでこに向ける」と訳出した。一方で、「傾」を動詞の誤字とみなす見方もある。徐震堦校(『敦煌變文集校記再補』(『華東師大學報・人文科學』一九五八年二期)は「傾」(傾ける)の誤とする。鄭振鐸『中國俗文學史』(作家出版社一九五四年)「第六章變文、六」(二三六頁)は本句を引用する中で、全く字形の違う「澆(注ぐ)」と作る(『校注』はこの問題について、原字を「顛」(やつれる・憂える)」と翻字した上で、音の近い「澆」に通ずるとみなしたのである)と指摘する。宋の丁度ら撰『集韻』(上海古籍出版社、上海図書館藏述古堂影宋抄本影印、一九八五年)に拠れば「顛」は「慈焦切」、「澆」は「堅堯切」。或いは、「傾」字と同音の「垂(垂らす)」の誤字である可能性もあるか。

(二五)着者左穿如右穴:「触れた者は左の穴から右の穴へ貫かれる」と訳出。「者」を順接用法として「触れれば、当たれば」と訳すことも可能。「如」は「往」「去」(行く)の意と解釈したが、徐震堦校(『敦

煌變文集校記再補』(『華東師大學報・人文科學』一九五八年二期)は「而」と読むべきとし(順接の意か)、『校注』もこれに従う。

(一六)鏹:S2614(原)は「箭」を書き損じて墨で消し、下に「箭」を書き直している。

(一七)劒輪:劒を輪状に形成したもののか。唐の道世撰『法苑珠林』(『法苑珠林校注』(中華書局二〇〇三年) 卷七「六道篇第四、第六地獄部、受報部第三」に「十八隔中阿鼻地獄、有……十八刀輪地獄、十八劒輪地獄」と見えることから、片刃の「刀輪」と両刃の「劒輪」という区別があるようである。

(一八)為言:ふつう「人に話す」の意で、ここでは文脈にそぐわない。『校注』に従い、音の近い「謂言」(〜と思う)に通ずるとみなした。「謂言」は唐の張鷟撰『遊仙窟』(『遊仙窟校注』(中華書局二〇一〇年)に「向見稱揚、謂言虛假。誰知對面、恰是神仙(もとより美しい方と称揚されていましたが、虚言であろうと思っておりました。どうして想像できたでしょう、対面してみれば、まさに仙女のようであるなど)」と用例がある。P2319(甲)の「唯言」もやはり同音の「謂言」に通ずるか。

(一九)把:S2614(原)とP2319(甲)は「把」と作り、杏雨羽UT1は「把」と作る。「把」と「把」は通字(注(一〇)参照)。ここでは箒や熊手など、物を搔き寄せたりならしたりする道具を指す。

(二〇)樓聚:「樓」は樓閣、「聚」は集めるの意であり、文脈が通らない。「樓」は徐震堦校(『敦煌變文集校記補正』(『華東師大學報・人文科學』一九五八年一期)・『校注』も言うように、写本における手偏

と木偏の混同による「摟」の通字で、ひびける・集めるの意だろう（宋の丁度ら撰『集韻』卷二平聲二「十虞」、「摟、曳也、聚也、一曰挽使申、通作婁」）。「摟」と「聚」で同義連文を構成する。

《散文》

S.2614(原) : 目連聞語、啼哭^(中)嗟向前、問言獄主、^(中)「此箇獄中、有一
 P.2319(甲) : 目連聞語、啼哭^(中)嗟向前、問言獄主、^(中)「此箇獄中、有×
 杏雨羽071 : 目連聞語、啼哭^(中)嗟向前、問言獄主、^(中)「此箇獄中、有×

青提夫人已否。」獄主啓言和尚、「是何親眷。」目連啓言、「是頻道慈母。」
 青提夫人已否。」獄主啓言和尚、「是何親眷。」目連啓言、「是××慈母。」
 青提夫人已否。」獄主啓言和尚、「是何親眷。」目連啓言、「是貧道慈母。」

獄主報言和尚、「此箇獄中、無青提夫人。向前地獄之中、惣是女人。」
獄主報言和尚、「此×獄中、無青提夫人。向前地獄之中、惣是女人、

(三四)

□□□□□	應得相見。」	目連聞語更往×前行、	×××××	至一地獄。	高下可有
□□□□□	應得相見。」	目連聞以 ^(二六) 更往×前行、	×××××	至一地獄。	高下可有
□□□□□	應得相見。」	目連聞語更往×前行、	×××××	至一地獄。	高下可有
□□□□□	應得相見。」	即前行、	于時中間、 ^(二七)	至一地獄。	高下可有

一由旬、黑煙蓬勃、梟氣動天。見一馬頭羅刹、手把鐵杈、意×而立。(九)(一〇)(一一)(一二)(一三)

☐☐☐
☐☐☐
☐氣動天。見一馬頭羅察、手把鐵叉、意☐☐☐

目連問^(四)、「此箇名何地獄。」羅刹荅言、「此是銅柱鐵床地獄。」目連問曰、「此箇名何地獄。」羅刹荅言、「此是銅柱鐵床地獄。」目連問曰、「此箇名何地獄。」羅刹荅言、「此是銅柱鐵床地獄。」

<p>□</p> <p>○中罪人、生存在日、 ××××× ×××××</p>	<p>曰、「獄中罪人、生存在日、有何罪業、當墮此獄。」</p> <p>作何事業、當墮此獄」 ×主蒼言、「獄中罪人 ××××× ×××××</p>	<p>曰、「獄中罪人、生存在日、有何罪業、當墮此獄。」</p> <p>主蒼言、「在生</p>
--	--	--

之日、	女將男子、	男將女人、	行姪欲於父母之床。	弟子於師長之床、	奴
之日、	女將男子、	男將女人、	行姪 ^(七) 浴於父母之床、	弟子於師長之床、	奴
××	女將男子、	男將女人、	□□□□□□□□	弟子於師長之床、	奴

婢於曹主之床、當墮×此×獄之中。東西不可竿、男子女人相和一半
(三八)
 婢於曹主之床、當墮於此地獄之中。東西不可竿、男子女人相和××
(三九)
 婢於曹主之床、當墮於此地獄之中。東西不可竿、男子女人相和××
(四〇)

× 一 一
半 半 半^(四)
」 』 』

【現代語訳】

目連は言葉を聞くと、声を上げて泣きたため息をついて前へ進み、獄主に尋ねます、「この獄の中に、青提夫人という人はおりませぬか。」獄主は和尚に申します、「どのような親族です。」目連が申します、「私の母でござる。」獄主は和尚に答えます、「この獄の中に青提夫人はおりません。前方の地獄の中は、全て女です。きつと会えるでしょう。」目連は聞き終えるとさらに前へ進んで行き、とある地獄へやって来ました。高さはなんと一由旬（七キロメートル）もあり、黒い煙が勢いよく立ち上り、臭悪な気が天まで燻っておりまます。見れば一人の馬頭の羅刹が、手に鉄の刺叉を持ち、意気盛んな様子で立っておりまます。目連が尋ねます、「これは何という名の地獄でござるか。」羅刹は答えます、「これは銅柱鉄床地獄でござる。」目連が尋ねます、「獄の中の罪人は、生きていた時、どんな罪業があつて、この地獄へ落ちることになったのでしょうか。」獄主は答えます、「生きていた時、女は男を連れて、男は女を連れて、父母の床で房事を行ったのじゃ。弟子は師の床で、奴婢は主人の床で（房事を行い）、この地獄に堕ちることになったのだ。東から西まで数えきれぬほど、男と女が半分ずつ一緒になつておる。」

【注】

(111) 吹嗟：S2614(原)は「吹」、P2319(甲)は「喀」と作り、俱に字義不明。「咨嗟（嘆息する・哀嘆する）」の訛であろう。

(112) 此箇：この、これ。文言では単に「此」と表記するが、中世以

降「此箇」の用例が見られるようになる。まず敦煌出土文献には、『永變文』(S2204)の「路逢女人來委問、此箇郎君往何方(路上で女が訊ねてきました、この殿方はどこへ行くのでしょうか)」、『金剛般若波羅蜜經講經文』(P2331)の「此个名為邪見相(これを名付けて邪見相と言ふ)」といった用例が見られる。唐代の用例としては、他に詩に数例が存するのみ。例えば唐の羅隱「白角簷」(牛の白角製の櫛) 詩(『羅隱詩集箋注』(『岳麓書社二〇〇一年』)の「莫言此箇尖頭物、幾度撩人惡發來(この尖った物が、幾度も人を惹きつけて来たことは言うまでもない)」など。五代・宋代以降は文献に頻出するようになり、会話部分や白話が多用される文献に用いられていることを鑑みるに、本来は白話語彙であつたと考えられる。例えば五代後周の王仁裕撰『開元天寶遺事』(上海古籍出版社一九八五年)卷上「助嬌花」の「(帝)曰、「此箇花尤能助嬌態也」(お上が申された、「この花は美しい姿をたんへんよく彩ってくれる」)、宋の普濟撰『五燈會元』卷七「青原下五世、徳山鑒禪師法嗣」の「師謂衆曰、「此箇水牯牛年多少」(師はみなに申された、「この水牛は何歳であるか」)、宋の朱熹の語録である『朱子語類』(中華書局一九八六年)卷三八「論語二十、郷黨篇第六節」の「如何用絳色以爲飾。曰、便是不可曉、此箇制度差異(弟子が訊いた、)どのように絳色を(喪服の)飾りに用いるのでしょうか。(朱子が)答えた、全くわからない、この制度は普通ではない)、宋末を題材とした説話集『大宋宣和遺事利集』(台湾商務印書館一九六六年)の「蓋天大王呼左右賜酒與二帝太后曰、「我看此箇夫人面」(蓋天大王完顏宗賢は側近を呼んで酒を二帝の太后に賜つて言った、「私はこの

婦人の顔を見たい」など。

(III)頻道：S2614(原)は「頻道」P2319(甲)は無し、杏雨羽071は「貧道」と作る。「貧道」は僧の自称(4注(一)「頻道」参照)で、目連変文の抄本ではしばしば音の通ずる「頻道」と表記されるが、「貧」と「頻」は一般的には通字ではない。

(II)惣是女人：「惣」は「總」(本字は總)・「摠」の俗字(金の韓道昭撰『五音集韻』卷七「一董」、「摠・摠・作孔切、聚束也、合也、皆也、衆也。……惣・俗」)。「總是」はすべて・みな之意。ちなみにこの獄主は「前方の地獄にいるのは全て女」と言うが、本文では男性と女性が多々となっており、矛盾がある。

(V)應得：「應得」は「應(きつと・必ず)」の二音節化の意もあるが、ここでは文脈上「まさに」を得べし(きつとすることができる)と解釈すべきか。P2319(甲)は「應」に似た字を書きかけ、上から墨で消して「應」を書き直す。

(VI)聞以：S2614(原)は「聞以」P2319(甲)は「聞語」(話を聞いて)、杏雨羽071は紙破損。S2614(原)について、『敦煌變文集』は「以(已)」と翻字する(「終える」の意と解釈か)。敦煌變文ではしばしば「以」字と「已」字は通用される(疑問詞「以否」と「已否」など)ため、ここでも「聞き終える」の意と解釈してよからう。

(VII)于時中間：この句は杏雨羽071のみにある。杏雨羽071の本文は全体的にはS2614(原)と一致しているが、この前句でも、他二本が「更往前行」としている所を「□即前行」(□は紙破損)としており、この周辺で抄写に乱れが生じている。「于時中間」は文脈上「そのと

き途中で」の意だろうが、このような言い回しの用例は他の文献には見当たらず、違和感がある。或いは直前に「この先の地獄の中にいるのは全て女」という言葉がありながら、この後に至る地獄は男女半々であるのを不可解に思った抄写者が、「この地獄は寄り道」という意識で「于時中間」(その時途中で)と書き加えたのかもしれない。

(VIII)高下：上と下、高い所と低いところ。

(IX)一由旬：「由旬」は梵語 yojana の音写で、本来は牛に車をつけて一日ひかせる行程を意味する。転じて距離の単位、一説に約七キロメートル(『岩波仏教辞典』)。

(X)蓬勃：「蓬」は上にむかっている意。S2614(原)の「勃」は「勃(盛んに上るさま)」の俗字(五代遼の行均撰『龍龕手鏡』卷四「力部」、「勃」正、蒲没反、卒也、惡逆也。勃・俗、同上)。P2319(甲)は「勃」と「勃」の中間のような字体(「勃」の左上の「十」が「ホ」)だが、単なる訛字とみられる。「蓬勃」は盛んに上るの意。

(XI)臭氣勳天：「臭」は「臭」の俗字(唐の顔元孫撰『干祿字書』「去聲」、「臭・臭……並上俗、下正」)。「勳」は同音の「熏(かおる・におう)」に通ずるか。句全体は「臭悪な気が天まで燻る」と訳出。

(XII)羅刹：S2614(原)とP2319(甲)は「羅刹」と作り、杏雨羽071は「羅察」と作る。ともに梵語 rakṣas・rakṣasa の音写。詳しくは(4注(一八)「羅察」参照)。

(XIII)杈：さすまた(武器の一種)。P2319(甲)は「杈」、杏雨羽071は「叉」と作る。全て通字(明の張自烈撰『正字通』于集中「手部」「杈……通作叉、或借用杈」)。

(三三)意×而立：S2614(原)は「意而立」と作り、P2319(甲)は「意氣而立」と作るが、「意」は「こころ、思う」の意、「意氣」もふつう「氣概・氣性」の意であるから共に文意が通らず、句全体の文法的構造もよくわからない。杏雨羽071は「意」字以下紙破損。『校注』はP2319(甲)の「意氣而立」が正しいとみなし、「意氣」には「氣盛貌(意氣盛んなさま)」の意があるとして、敦煌文献『解座文匯抄』(P2305『校注』卷七)の「鑊湯誰管足才能、爐炭不憑君意氣(鑊湯「十八地獄の一つ、釜ゆで地獄」では誰が才能に足ることを氣に掛けてくれよう、爐の中の炭火は君子の意氣に応じて調節はしてくれぬ)」を例に挙げるが、「不憑君意氣」の「意氣」はやはり「氣概・心持ち」という名詞的用法ともとれ、根拠として不十分ではないか。かかる問題は残るものの、句全体は「(夜叉が)意氣盛んな様子で立っている」と訳出した。或いは、S2614(原)については、「意」は字形の似る「忽」の誤写、「忽而」で突然・にわかにの意、「立」は立ち止まるの意で、「にわかに立ち止まり、目連は訊ねた……」と下の句に連結している可能性もある。他に、音の似ている「已而(まもなくして)」、「因而(よって)」、「偉而(雄壮な様子)」を「意而」と誤写した可能性もある。この場合にはP2319(甲)は誤字を含んでいたS2614(原)のようなテキストの「意而立」の意味が分からず、「意氣而立」と改変したものと考えられる。

(三五)銅柱鐵床地獄…銅の柱を抱いたり鉄の床にはりつけられ、諸々の責め苦を受ける地獄。梁の武帝による勅撰で高僧らが編集した『慈悲道場懺法』卷四「出地獄第二」に既に、以下の如く、本変文と似た描写がある。「何謂地獄。經言、三千大千世界鐵圍兩山黑闇之間、謂

之地獄。……刀山劍樹、火磨火城。銅柱鐵床、火車火輪。飲銅吐火、大熱大寒、拔舌釘身、犁耕斧斫、刀兵屠裂。灰河沸屎、寒水淤泥。愚癡啼哭、聾盲瘡癰。鐵鉤鐵嘴。復有大小泥塑阿鼻地獄(何を地獄と言うか。經典に曰く、三千世界の鉄に囲まれた二つの山の暗闇のあたりを、地獄と言う。……刀山と劍樹、火の臼と火の城。銅柱と鉄床、火の車と火の車輪。銅を飲まされ火を吐き、とても熱かったり寒かったり、舌を抜かれ体を釘打たれ、くわで耕され斧でたたつ切られ、刀を持った獄卒にバラバラにされる。灰の河には汚物が沸き立ち、冷たい水と穢れた泥が浮かぶ。愚癡なる者が泣き叫び、聾盲なる者が声も出せずにいる。鉄の鉤爪に鉄の嘴。さらに大小の地獄と阿鼻地獄がある)」。また宋の李昉ら撰『太平廣記』卷三七七「再生三、趙泰」(晋の趙泰という男が地獄巡りをして生き返る話)に、「鐵牀銅柱、燒之洞然、驅迫此人、抱臥其上。赴即焦爛、尋復還生(鉄床銅柱を、赤々と焼き、この人を駆り立て、その上に抱かせたり寝させたりする。行けばすぐに焼けただれ、ついでまた生き返る)」とあり、後代まで同様のイメージが共有されていたと言える。

(三六)作何罪業、當墮此獄。と主吾言、獄中罪人：杏雨羽071は申句脱文(同詞脱文)を起こしている。つまり、本来はS2614(原)・P2319(甲)のように「目連問曰、獄中罪人、生存在日、有何罪業、當墮此獄。と主吾言、在生之日、女將男子、男將女人……」と作るべきところを、杏雨羽071の抄写者は、傍線部「生存在日」句から「在生之日」句へと目移りして、問を脱落させたものとみられ、その部分を後から行間に小字傍注の形で補っている。申句脱文は口述を筆録する過程で生じ

るとは考え難いため、杏雨羽OT1は文字テキストを抄写したものである可能性が高い。

(三十七) 姪欲：S2614(原)の「姪欲」は性欲の意。P2319(甲)は「姪浴」と作るが、「姪」字は『説文解字』卷十二下に拠れば「曲肩行兒(肩をなだらかにして歩く様子)」の意、「浴」は「体を洗う」の意で、ここでは文脈が通らない。字形の相似による訛字とみられる。

(三八) 曹主：主人の意。『校注』は、唐の王梵志「天下浮迷人」詩(P3418)の「強處出頭來、不須曹主喚(天下の流浪人の生活の)良い所と言えば困難な境遇から解放され、曹主に使役される必要がない」と句の「曹主」が、S6032では「主人」になっている例を根拠とする。語源を考察するに、東晋の陳寿撰『三國志』(中華書局排印本一九八二年第二版)卷四二「蜀書・杜瓊傳」に「古者名官職不言曹。始自漢已來、名官盡言曹、吏言屬曹、卒言侍曹(昔は官の職を呼ぶのに曹と言うことはなかった。漢に入ってから、官を呼ぶのにみな曹と言ひ、吏は屬曹、差役は侍曹と言うようになった)」とあるように、「曹」には諸事を掌る官の意があったことから、主人の意の「曹主」の語が派生したか。

(三九) 竿：「算」の俗字(唐の顔元孫『干祿字書』「去聲」)、「竿・算」並上俗、下正)。

(四〇) 相和：「相」は動作が相互間で行われることを表す副詞。「和」を「混ぜ合わせる」と解釈するか、「音楽や声に和す」と解釈するかによって、以下の二通りの訳が可能。(i)「男女が」混在する。北魏の賈思勰撰『齊民要術』(『齊民要術今釋』(中華書局二〇〇九年))「第

五七、養羊」に「作氈法。春毛・秋毛、中半和用(フェルトを作る方法。(羊の)春毛と秋毛を、半分ずつ混ぜて使う)」、唐の玄奘訳『大般若波羅蜜多經』卷五三に「往澹泊路觀所棄屍。餘骨散地、經多百歲或多千年、其相變青狀猶鵠色、或有腐朽碎末如塵、與土相和不可分別(以前清貧な生活を行っていた時路上で遺棄された屍を見た。のち骨は地に分散し、數百年數千年を経ると、その様子はハトのような青黒い色に変化し、或いは朽ちて塵のように碎け散り、土と混在して見分けがつかなくなった)」といった用例が見える。(ii)「男女の」叫び声が共鳴し合う」。こちらの「相和」の用例は多く、劉宋の鮑照「代堂上歌行」(『鮑照集校注』(中華書局二〇一二年)卷三)の「箏笛更彈吹、高唱好相和(箏と笛をさらに弾き吹き鳴らし、高らかに唱って互いに声を合わせるのを好む)」や、後秦の佛陀耶舍口訳／道含筆録『佛說長阿含經』卷一八の「鳧鴈鴛鴦異類奇鳥、無數千種相和而鳴(野鴨や鴛鴦など様々な種類の珍しい鳥、数えきれぬほどの種類が互いに声を合わせて鳴いている)」乃至無數衆鳥相和悲鳴(甚だしきは無數の群鳥が互いに声を合わせて悲しげに鳴いている)」といった例が見られる。

(四一) 十半一半：S2614(原)はもと「一半一半」と作って上の「一半」を墨で消し、P2319(甲)は「一半」、杏雨羽OT1は「半」と作る。いずれも意味は通るが、唱に入る直前であるため、リズムがよくなるよう、字数を調整しようという意識が働いた故に異同が生じたか。つまり、S2614(原)はもと「相和一半一半」と作っていたのを、直前の「男子女人」の四字に対応するよう、「相和一半」と短縮。P2319(甲)も「男子女人」と「相和一半」で四字句・四字句の形。杏雨羽OT1は「女人

(井口)

未出。

未出。
云と

未出。

13

鐵鑽長交×豊

疾離入

と斷。

出。

一〇

末田、

女は鉄の寢床に寝かされて全身に釘を打たれ、男は銅の柱を抱か

女は鉄の寝床に寝かされて全身に釘を打たれ、男は銅の柱を抱かされて胸が焼けただれる。鉄のきりは長くて交叉しあいその鋭いこと矛や劍のように、鋭い齒はきりよりもさらに鋭い。腹が減ればたちまち鉄の玉を詰め込まれ、渴きをうったえればまた鉄の汁をそそがれる。まきびしが腹に食い込んで刀で裂かれるかのよう、空中では劍やほこが飛び跳ねて星のように散らばる。刀が骨や肉をえぐってこま切れにし、劍がはらわたを切り裂いてずたずたにする。地獄と天堂は対をなしているとは言えない。天堂では日夜楽の音が鳴り響いているが、地獄では出してくれと求める相手もない。父母が現世にあつて追福してくれたとしても、功德の七分の一しか得られない。たとい東海が桑畑に変わるうとも、地獄で責め苦を受けている者はやはり出られない。

(二)兇:「胸」の音通。P.2319(甲)は「胸」の異体字「𠂔」に作る。

(二)鐵鑽長交利鋒釵…「鑽」はきり(錐) またはのみ、たがねなど穴

を穿つ道具。「長」は形容詞として訳したが、文構造的には副詞用法のほうが自然であり、その場合「いつでも」の意味か。「交」を役用法とみて、全体として「鉄のきりは常に矛や剣よりも鋭く研ぎ澄まされている」ともとれる。

(三) 鑣牙快似如錐鑽：「鑣」は鋭利なこと。杏雨羽071の「擣」も同義。ここで鋭い歯というのが何を指すかは判然としないが、前の韻文に見える「把」すなわち熊手の歯か。「似」は比較用法。白居易「新製布裘」に「桂布白似雪、吳綿軟於雲（桂林の布は雪よりも白く、吳の綿は雲よりも柔らかい）」（『白居易集箋校』〔上海古籍出版社一九八八年〕巻一）とある。

(四) 女卧鐵床釘と身……唱渴還將鐵計濯^マ…ここに見える鉄床・銅柱・鉄丸・鉄汁（銅汁）はいずれも灼熱した金属による責め苦で、地獄の描写として仏典に頻出する。前出12注（三五）「銅柱鐵床地獄」参照。杏雨羽071では鉄汁が銅汁となっており、テキストの欠損のため明らかではないが鉄床と銅柱、鉄丸と銅汁で対に整えられていた可能性もある。たとえば『過去現在因果經』卷三には「見地獄中考治衆生、或洋銅灌口、或抱銅柱、或臥鐵床或以鐵鑊、而煎煮之、或於火上、而加鼎炙……（地獄で衆生を拷問するには、あるいは溶けた銅を口にそそぎ、あるいは銅の柱を抱かせ、あるいは鉄の寢床に寝かせあるいは鉄の鍋に入れ、焼いたり煮たり、あるいは火にかけて炙り……）」とあり、また『地藏菩薩本願經』卷上には「飢吞鐵丸渴飲鐵汁（飢えれば鉄の玉を吞まされ、渴けば鉄の汁を飲まされる）」とある。

(五) 疾離入腹如刀臂…「疾離」は疾藜、植物のハマビシのことであるが、

地面に撒いて敵兵の前進を阻むためのとげのはえた武器、いわゆるマキビシをも指す。七字めはSōji(原)、杏雨羽071ともに「臂」だが、裂く意味の「劈」か「擘」の通用字もしくは誤字であろう。

(六) 斥…各本とも「片」か「斥」の異体字。『校注』は「斥」が古くは「尺」と通用したことから、「斥斥」すなわち「尺尺」であって下の「寸寸」と対をなすものとするが、「片片」としても文意はほぼ同様に通る。

(七) 天堂曉夜樂轟と…仏典での表現としては、法照撰『淨土五會念佛誦經觀行儀』西方雜讚「西方極樂樂轟轟、聞者迴心願往生（西方極樂にては樂の音が鳴り響き、聞く者は心を入れかえて往生を願う）」などの例がある。

(八) 求出…杏雨羽071は「救出」とし、「救い出してくれる人もない」の意となる。Sōji(原)も「求」を「救」の略字とすれば同様に解釈できる。

(九) 父母見存為造福、七分之中而獲一…七分獲^{しちぶんえつ}一。死後に親族が追善供養をしてくれても、亡者はその功德の七分の一しか得ることはできないということ（『仏教大辞典』〔龍谷大学編、富山房〕。「見」は「現」の通用字。『地藏菩薩本願經』卷下に「地藏答言……若有男子女人、在生不修善因多造衆罪、命終之後、眷屬小大為造福利、一切聖事七分之中而乃獲一、六分功德生者自利（地藏菩薩が答えて言うには……もし男でも女でも、生前に功德を積まず多くの罪を作ったなら、寿命が尽きたのち、親族たちが供養をしてくれても、一切の功德のうち七分の一しか得ることはできず、七分の六の功德は生者のためのものとなる）」という。

(一〇)東海變業田：「業」は「桑」の異体字。仙女麻姑的故事から、世の中の転変の激しいことのたとえ。葛洪『神仙傳』卷七「麻姑自説云、接待以來、已見東海三爲桑田（麻姑は言った。「この前お会いしてより、既に三度東海が桑畑に変わったのを見ました」）」（『増訂漢魏叢書』（育文書局一九一七年））。

《散文》

S.2614（原）：目連言訖、更往前行。須臾之間、至一地獄。^啓啓言獄主、P.2319（甲）：目連言訖、更往前行。須臾之間、至一地獄。啓言獄主、杏雨羽071：目連言訖、更往前行。須臾之間、至一地獄。啓言獄主、

「此箇獄中有一青提夫人已否。」獄主報言、「青提夫人是和尚阿嬢。」

「此箇獄中有一青提夫人已否。」獄主報言、「青提夫人是和尚阿嬢。」

「此箇獄中有×青提夫人已否。」獄主報言、「青提夫人是和尚阿嬢。」

目連啓言、「是××慈母。」獄主報×和尚曰、「三年前有一青提夫人

目連啓言、「是××慈母。」獄主報×和尚曰、「三年前有一青提夫人

目連啓言、「是貧道慈母。」獄主報言和尚×、「三年前有一青提夫人

亦到此間獄中。被阿鼻地獄牒上索將、^(二)今見在阿鼻地獄中××。」目連

亦到此間獄中。被阿鼻地獄牒上索將、今見在阿鼻×獄中××。」目連

亦到此間獄中。被阿鼻地獄牒上索將、×見在阿鼻×獄中受苦。」目連

×× 悶絶僻^(三)×、良久氣通、漸×前行、即逢守道羅刹問××處。
×× 悶絶僻地、良久氣通、漸×前行、即逢守道羅刹問××處。
聞語、悶絶僻地、良久氣通、漸×前行、即逢守道羅刹問阿嬢處。若爲

【現代語訳】

目連は言い終えると、更に前進いたします。少しのうちに、一つの地獄に着きました。獄主に申しますには、「この地獄に青提夫人という人はおりませんか。」獄主は答えて、「青提夫人とは和尚様の母上ですか。」目連は申します。「我が母上でございます。」獄主は和尚に答えて言うには、「三年前、青提夫人なる人がこの地獄へ参りました。阿鼻地獄から文書で求められ、今は阿鼻地獄におります。」目連は悶絶して地に倒れ、長いことたつてから息を吹き返し、だんだんに進んでゆきましたところ、道の番人をつとめる羅刹に出会って尋ねる場面となります。

【注】

(一)被阿鼻地獄牒上索將…阿鼻地獄は無間地獄のこと。阿鼻獄とも。阿鼻は梵語 *avīci* の音写で、間断なく苦を受けるので無間と漢訳される。八大地獄の一つ。閻浮提の下二万由旬の所にあり、五逆・謗法の重罪を犯した者が堕ちて劍樹・刀山・鑊湯などの激しい苦を受ける（『広説』）。これより以前、目連が五道將軍に母の所在を尋ねる場面に「三年前已前有一青提夫人、被阿鼻地獄牒上索將、見在阿鼻地獄中受苦」とあり、この箇所とほぼ同じ表現が用いられている。「將」は動詞の後

に付いて動作の完成・実現・持続など様々なニュアンスを表す語。白居易「賣炭翁」詩の「一車炭重千餘斤、宮使驅將惜不得（牛車一台の炭で重さは千余斤、宮廷の使いが追い立てていつて惜しんでもどうにもならぬ）」（『白居易集箋校』巻四）など。前出⑩注（二）「索將」参照。

（111）僻×：S.2614（原）は「僻」P.2319（甲）は「僻地」「杏雨羽071」は「僻地」とする。『校注』は「僻」は「僻」の仮借字とする。今これに従い、P.2319（甲）と杏雨羽071によって「地」を補い訳した。「僻」は倒れる意味で、『大方便佛報恩經』巻一「父王苦惱生狂癡心、迷悶僻地。以水灑面、七日方能醒悟（父王は苦惱のあまり正気を失い、悶絶して地に倒れた。水を顔に振りかけ、七日たつてようやく目が覚めた）」など多くの例がある。

（112）守道：「道路の番をする」、「仏道を守護する」の二通りの解釈が考えられるが、次の韻文に「當大道」とある点と考えあわせ、前者の方向で訳した。

《唱》

S.2614（原）：目連行歩多愁惱、刀劒路傍如野草。側耳遙聞地獄

P.2319（甲）：××××××××××××××××××××××××

杏雨羽071：目連行歩多愁惱、刀劒路傍如野草。側耳遙聞地獄

問、風大^{（一四）}一時聲^{（一五）}。爲憶慈親長欲斷、前路不^{（一六）}婁行即到。忽然逢
××××××××××××××××××××××××××××××××××××
問、風火一時聲^{（一七）}。爲憶慈親腸欲斷、前路不^{（一八）}婁行即到。忽然逢^{（一九）}

着夜叉王、按劒坐^{（二七）}。啓言××「貧道是釋迦如来^{（二八）}弟子、
××××××××××××××××××××××××××××××××××××
着夜叉王、按劒坐^{（二九）}。啓言獄主「貧道是釋迦如来^{（三〇）}弟子、

證見^{（三一）}三^{（三二）}明出生死。哀^{（三三）}慈母号青提、亡過魂靈^{（三四）}於落^{（三五）}此。適来巡歷諸
××××××××××××××××××××××××××××××××××××
證得三^{（三六）}明出生死。哀^{（三七）}慈母号青提、亡過魂靈^{（三八）}於落^{（三九）}此。適来巡歷諸

餘^{（四〇）}獄、問者咸言稱不是。近云將母入阿鼻、大將亦應^{（四一）}之此事。有無
××××××××××××××××××××××××××××××××××××
餘獄、問者咸言稱不是。近云將母將阿鼻、大將亦應^{（四二）}知此事。有無

實說莫^{（四三）}沉吟、人間乳哺最恩深。聞說慈親骨髓痛、造此^{（四四）}誰知貧道
××××××××××××××××××××××××××××××××××××
實說莫^{（四五）}沉吟、人間乳哺最恩深。聞說慈親骨髓痛、造次^{（四六）}誰知貧道

心。
×
心。

【現代語訳】

目連は歩みつつ大いに愁え苦しむ、刀劒が路傍に茂って野草のよ

う。耳をそばだてれば遙かに聞こえるのは地獄にて、風と火が一度にたてるごうごうたる響き。母上を思えばはらわたもちぎれんばかりだが、前途は長くはないから行けばすぐにもたどり着こう。だしぬけに夜叉王の、剣に手をかけ蛇に座して大道をふさいでいるところに出会う。申すよう、「拙僧は釈迦如来の弟子にて、三明^{さんみょう}の悟りを開き生死の境涯を脱しました。哀しや母上は名を青提といい、亡くなって靈魂がここへ落ちてきております。さきほど諸々の地獄を経巡って参りましたが、問うた相手はみなそこにはいないと言いました。近頃言われたのは母を阿鼻地獄に入れたとのこと、夜叉大將様もきつとそれをご存じでしょう。いるのかどうかありのままおっしゃってためらわないで下さい、人の世で乳を与え育まれたのは最も恩の深いもの。母上のことを聞けば骨の髄まで痛む思い、拙僧の心をおいそれと誰が分かりましょうか。」

【注】

(一四) 𪛗^ハ：「𪛗」の異体字。

(一五) 𪛗^ハ：「腸」の音通であろう。杏雨羽⁰⁷¹では「腸」とする。

(一六) 不婁^ハ：「婁」は^ハでは形容詞的に用いられており、「多」[够]などと同義と思われる。『校注』に引く徐復注に、唐代の俗語では「婁」を「多」の意味に用い、従って「不婁」は「不多」に同じという。敦煌変文『韓擒虎話本』(S2144)に見える「不𪛗咬𪛗博唆之間(十分に咬んで咀𪛗もしな^ハう^ハち^ハ)」の「不𪛗」なども同様。

(十七) 忽然逢着夜叉王、按劒坐地當大道^ハ：夜叉は梵語 *yakṣa* の音写。

他に藥叉、夜叉などとも。北方に住むクヴェーラ神の配下と考えられる半神。仏教に取り入れられて八部衆の一つとされ、毘沙門天の眷属として北方を守護する存在となった。また羅刹とともに八部鬼衆の一つとされ、人を食う悪鬼ともされる(『広説』)。ただしここでのいう夜叉王は、直前の散文でいう羅刹と同一の存在でなければ筋が通らない。『入楞伽經』『大乘入楞伽經』では羅刹の王を夜叉王と訳しているなど、両者が混同される場合もあった。「𪛗」は「蛇」の異体字。羅刹であれば普通、劒を持ち白獅子に乗る姿で表されるが、ここで蛇に座した姿で描写されているのは何に由来するかはつきりしない。夜叉が北方の守護者とされることからすると、玄武のイメージの影響かとも想像される。通常、四霊の一つである玄武が亀と蛇を踏まえる道教の神(真武神)として認識されるようになるのは宋代以降とされるが、唐代に既にそのイメージがあつたのかもしれない。

(一八) 證見三明^ハ：「證」は悟る意。「三明」は特別な修行者が持つことのできる六神通のうち、三つを取り出していうもので、宿世の因縁を知る宿命明・未来の果報を知る天眼明・現在の煩惱を絶つ漏尽明(『広説』)。

(一九) 擲來巡曆諸餘獄^ハ：S2614(原)が「擲」「曆」とするのは、それぞれ「適」「歴」の音通であろう。「適來」はさっき、先程の意味。「諸餘」は全て、諸々といった意味で用いられる。

(二〇) 大將亦應之此事^ハ：「大將」は夜叉大將で、夜叉を統率する者。ここでは上で夜叉王と呼ぶのと同じ意味に用いられている。S2614(原)で「之」とあるのは「知」の音通であろう。この韻文はS2614(原)

が発音による通用字を用いている箇所は、ほぼ杏雨羽071では正しい用字となっている。

(二)造此：「造次」に同じ。倉卒に、みだりに、などの意。

(大賀)

14

《唱》

S2614(原)：夜又聞語心邊^(一)、直言「更亦無刑迹^(二)。和尚孝順古今

P2319(甲)：××××××××××××××××××××××××××××××××

杏雨羽071：夜又聞言心蕩心、直言「更亦無形迹。和尚孝順古今

希、冥途不憚親巡曆^(三)。青提夫人欲似有^(四)。影向不能全指的^(五)。×××

××××××××××××××××××××××××××××××××

無、冥途不憚親巡歷。青提夫人欲似有^(四)。影向不能全指的。×××

青提夫人欲似有

影向不能全指的。三年之^(六)

××××××××××××××××××××××××××××××××

××××××××××××××××××××××××××××××××

外有名来、太山部上収文惡^(七)。和尚可不聞阿鼻獄^(八)。灌鐵圍城銅作壁。

業風雷振一時吹、到者身骸似狼寂。勸諫闍梨早皈舍、徒煩此處相

××××××××××××××××××××××××××××××××

業風雷振一時吹、到者身骸似狼寂。勸諫闍梨早歸舍、徒煩此處相

尋覓。不[■]早去見如来、撻^(九)臂懊惱知何益。」

尋覓。不如 早去見如来、撻^(九)臂懊惱知何益。」

尋覓。不如 早去見如来、撻^(九)臂懊惱知何益。」

【現代語訳】

夜又はこれを聞いて心憂い、まっすぐに申すには、「少しの気配もありませぬ。和尚様の孝行は古今に稀なるもの、黄泉路をも恐れず自らお巡りになるとは。青提夫人はいるようではありますが、はっきりせず、すっかり明らかというわけにはまいりません。三年前に名前がまいました、泰山の部局からの文書は激しいものでした。和尚様阿鼻地獄のことを聞いておられませぬか、鉄を注いで城壁とし銅にて壁を作り、業の風に雷が鳴ればたちまち吹き飛ばされ、たどり着いた者の体はばらばらになったかのように。お坊様早く宿舎にお帰りあれ、ここにて捜されるのもあだなこと。早く行つて如来にお目通りなされ、胸を打って悲しもうと何の益がありましょう。」

【注】

(一)心邊：杏雨羽071は「心蕩心」とする(P2319(甲)は缺)。『漢語大詞典』は「邊邊」を立項し、「憂懼貌」とするが、挙例は「目連變文」のこの箇所のみである。ただ、そこでも指摘され、『校注』も述べるように、「邊」は「惕」と通用することが多く、「惕惕」であれば古くは『毛詩』『陳風』の「防有鵲巢」の「心焉惕惕(心憂い)」以来、憂い恐れる様を形容する語として用いられてきたものである。母を捜す

目連に同情した夜叉の態度を言うか。杏雨羽071の「心蕩心」は、字形の類似ゆえに「邊」もしくは「惕」を「蕩」に、踊り字を「心」に誤ったものか。

(一) 刑迹…杏雨羽071は「形迹」とする(P2319(甲)は缺)。「刑」と「形」がしばしば通用する点から考えて「形迹」のことと思われる。

(三) 巡曆…杏雨羽071は「巡歴」とする(P2319(甲)は缺)。「曆」「歴」もほぼ通用字と言って差し支えない。

(四) 青提夫人欲似有…杏雨羽071はこの句を書き落としたらしく、後から行頭に当たる次句の斜め上に書き込んでいる。

(五) 影向…『校注』は「影響」とするが、各本とも「影向」である。

この表記は、「伍子胥變文」(P2794V)に「妾須禁閉在深閨、与君影向微相識(私は奥深い部屋に閉ざされた身のはず、あなたのことははつきりしません)が知り合ったことはなさそうです」とあるように、敦煌變文では複数用いられている。さきの「伍子胥變文」の例や元稹「夢遊春」詩(『元稹集編年箋注』(三秦出版社二〇〇二年)元和五年)に「逡巡日漸高、影響人將寤(たちまちのうちに日は次第に高く、ぼんやりとしながら人は目覚めようとしているようだ)」とあるように、ぼんやりしてはつきりしないさまを形容する語として用いられる。

(六) 指的…『南齊書』(中華書局一九七二年)卷四十「晉安王子懋傳」に見える南齊の武帝の命に「吾今亦行密纂集、須有分明指的、便當有大處分(私も今から密かに兵を集めて、確かなことが分かったら、大規模な行動を起こそう)」と口語的な文脈で「分明」と並列して用いられているように、確かなことを意味する口頭語的な語彙として、南

北朝期には用いられていたようである。唐代においても李白「草創大還贈柳官廸」詩の「自然成妙用、孰知其指的(おのずと精妙な作用をするが、確かなことを知る者はいない)」のような例がある。

(七) 三年之外有名来……以下三句は杏雨羽071のみに存在する。『校注』は後の「灌鐵為城銅作壁」に附した校注で項楚校を引いて、ここには七言一句が欠けていると推定するが、杏雨羽071の本文に従えば、欠けているのは三句であることになる。内容から見ても、杏雨羽071の本文が原型を伝えている可能性が高いものと思われるため、補って訳す。

(八) 太山部上収文惡…「文惡」が一語であるとすれば、『史記』卷一二二「酷吏列傳」に「司馬安之文惡」と見え、『集解』は「漢書音義曰、以文法傷害人(法律で人を害すること)」と注記している。しかしここでは通りにくい。「受け取った文書の内容が激しいもので」ということか。

(九) 和尚可不聞阿鼻獄…七言句とすると一字多い。字余りの可能性もあるが、「可不」が白話における強調表現として定型化したために「可」字が入り込んだのかもしれない。

(一〇) 搥胸懊惱…『中阿含經』卷三に「愁煩憂感、搥胸懊惱(心配し憂えて、胸を打って悩む)」とあるように、仏典に見える表現。

《散文》

S.2614(原)：目連見説地獄之難當、即迴^(一)×擲鉢騰空^(二)。須臾之間、即至
 P.2319(甲)：目連見説地獄之難當、即迴身擲鉢騰空。須臾之間、即至
 杏雨羽071：目連見説地獄之難當、即迴×擲鉢騰空。須臾之間、即至
 娑羅林所^(三)、遶^(三)三^(三)却坐一面、瞻^(三)尊^(三)顏、目不暫捨、白言世尊處^(四)。
 娑羅林所、遶^(三)三^(三)却坐一面、瞻仰尊顏、目不暫捨、白言世尊處。
 娑羅林所、遶^(三)三^(三)却坐一面、瞻仰尊顏、目不暫捨、白言世尊處。

【現代語訳】

目連は地獄の難を言われると、すぐさま身を翻し、鉢を投げて空中に飛び上がり、たちまちのうちに娑羅林の地に着くと、仏の周りを三度めぐり、一方に退いて、ご尊顔を拝し、まじろぎもしません。世尊に申し上げるところです。

【注】

(一)即迴擲鉢騰空：P.2319(甲)は「即迴身擲鉢騰空」とする。「迴」の目的語がないと意味を取りにくいいため、この方が本文としては適切だが、「身」が脱落したのか、あるいは意味が通じにくいため補ったのかは定めがたい。

(二)娑羅林所：『大涅槃經』卷中「語阿難言。汝可往至娑羅林中。見有雙樹（涅槃を前に釈迦が）阿難に語るには、「おまえは娑羅林の中に行くがよい。二本の木を見るであろう）」とあるように、釈迦寂

滅の地。「娑羅林所」という語は隋の闍那崛多訳『四童子三昧經』に「一

時婆伽婆在俱尸那國力士居地娑羅林所雙樹間（あるとき世尊はクシナ国の力士の地なる娑羅林所の双樹の間におられて）」と見える。

(三)瞻×尊顏：P.2319(甲)と杏雨羽071は「瞻仰尊顏」とする。リズムから考えても四字句の方が自然であり、「瞻仰」が仏典における定型表現である点から考えて、「仰」が脱落しているかと思われる。

(四)白言世尊處：杏雨羽071は「處」を欠く。このテキストは全体に「處」がなく、文字がきれいであることを考え合わせると、読み物として抄写されたものかと思われる。

《唱》

S.2614(原)：「闕事如^(一) 日已遠、追放縱由天地遍^(二)。阿耶惟得生
 P.2319(甲)：「闕事如 來日已遠、追放縱由天地遍。阿耶惟得上
 杏雨羽071：「闕事如 來日已遠、追訪縱由天地遍。阿耶唯得上

天上、慈母不曾重會面。聞道阿鼻見受罪、思之不覺肝腸斷。猛火
 生天、慈母不曾重會面。聞道阿鼻見受罪、思之不覺肝腸斷。猛火
 生天、慈母不曾重會面。聞道阿鼻見受罪、思之不覺肝腸斷。猛火

龍蛇難向前、造次无由作方便。如來神力移山海、一切衆生多愛戀^(三)。
 龍蛇難向前、造次无由作方便、如來神力移山海、一切衆生多愛戀。
 龍^(四) 難向前、造次无由作方便、如來神力移山海、一切衆生多愛戀。

臣急由來解告君、如何慈母重相見。」^(一〇)世尊喚言「×大目連、且莫臣急由來解告君、如何子母得相見。」世尊喚言「×大目連、且莫臣急由來解告君、如何子母重相見。」世尊喚言「唯大目連、且莫

悲哀泣、世間之罪由如繩、不是他家尼碾來。^(一一)火急將吾錫杖与、能悲哀泣、世間之罪由如繩、不是他家尼碾來。火急將吾錫杖与、能悲哀×、世間之罪由人遣、不是他家尼碾來。火急將吾錫杖与、能

除八難及三災。^(一二)但知懃念吾名字、地獄應×為如開。」

除八難及三災。但知懃念吾名字、地獄應當為汝開。」

除八難及三災。但知懃念吾名字、獄地應當為汝開。」

【現代語訳】

「如来様にお仕えできなくなりましてより日が遠く、天地あまねくたずねて回りました。父上ばかりが天上に生まれることができておりまして、慈母とは再会もしておりません。聞けば阿鼻にて罪を受けているとのこと、それを思えば我知らず断腸の思いにございます。猛火に龍蛇あつて進むこともなりかね、とつさにはうまくやる手だてもありません。如来の神力は山海をも移されるもの、すべての衆生は恋ひ慕っております。私が急いでやって来ましたのはあなた様に申し上げることができからです。どうすれば母にまた会えましょうか。」世尊は大目連に呼ばります。「まずは泣くでない（失韻。あるいはセリフか）。世の罪は果てしなく、別の人間がでっちあげたものではない。

取り急ぎわしの錫杖を与えよう、八難と三災を避けることができよう。わしの名を懇ろに唱えることさえわかれば、地獄は必ずやおまえのために開くであろう。」

【注】

(一五) 闕事…通常は『遊仙窟』に「且得不闕事而已（何とかしくじらずにすむ程度です）」とあるように失敗することをいい、『舊唐書』卷一七九「張潛傳」に「一二年間必無闕事（一二年の間に問題が起こることは決してありません）」とあるように、名詞としても用いられる。ここでは対象が如来であることから考えて、字義の通り、仕えることができないということか。

(一六) 追放縦由天地遍…杏雨羽「」は「追放」を「追訪」とする。「追訪」は追いつめることを意味する語として用いられる。前出〔注〕(一五)「追放縦由天地邊」で述べたように、本来「追訪」であるものが、音が近いことから「追放」と表記されたものか。

(一七) 惟得生天上…項楚校は「惟」を「雖」の誤りとするが、各本とも「惟」であり、このままで意味上も問題ないため、改める必要はないものと思われる。

(一八) 愛戀…『法苑珠林』卷二十「致敬篇 述意部」に「我有何善、聞佛名號、欣喜加敬、瞻仰聖顏、愛戀無厭（私に何の善があるからとて、仏の御名を聞くことができるのだ」と、歓喜して敬意を示し、御顔を仰ぎ見て、恋慕って飽きることがない）」とあるように、仏を慕う意味で用いられる。

(一九)臣急由來解告君…釈迦と弟子の関係を君臣とする例は本作品の中ではここだけである。「解」は可能的助動詞。「由來」は通常の「ずっと」という意味のほかに、『遊仙窟』に「妍華天生足、由來能裝束(艶やかさは生まれつき十分に、もともと身繕いにも長けて)」とあるように、唐代には「元來」の義で用いられることが多いが、いずれもここには当てはまらないように思われる。「由來」が原因を意味する名詞として用いられる点から考えて、「私が急いでいる理由はあなたに申し上げることができるからです」もしくは「由來」が動詞的に機能していると考えて「私が急いでいるのはあなたに申し上げることができるからです」のいずれかかと思われる。仮に後者で訳す。

(一〇)慈母重相見：P2319(甲)は「子母得相見」、杏雨羽071は「子母重相見」とする。「母にまた会う」ということで意味的には問題ないが、「子母」の方がより自然かとも思われる。杏雨羽071も「子母」である点からすると、こちらが原型で、「慈母」が音の近似に由来する誤りである可能性もある。P2319(甲)が「得」とするのは、より意味がわかりやすい方向に改めたものか。

(一一)世尊喚言大目連且莫悲哀泣：杏雨羽071は「世尊喚言唯大目連且莫悲哀」とする。これはおそらく呼びかけの語であり、「大目連」は地の文ではなく、世尊の言葉ということになる。

(一二)世間之罪由如繩：杏雨羽071は「世間之罪由人造」とする。「由」は「猶」と通用する。「如繩」の意味は定かではない。「如繩」は通常はまっすぐな様の形容だが、ここには当たらない。「繩繩」は『毛詩』「周南」の「蠡斯」に「蠡斯羽薨薨兮、宜爾子孫繩繩兮(イナゴの羽

はザワザワと、めでたし子孫は続々と)」とあるように、数が多いことのとたえであり、ここも数が多いことをいうのかもしれないが、「繩」一字でこのような意味になるかには疑問がある。あるいはまっすぐにずらりと並ぶということかもしれない。仮に「果てしなく」と訳す。

(三)泥礪…未詳。あるいは「泥捏」か。『五燈會元』巻十四に「泥捏三官土地堂(泥で三官(道教の神)や土地神の祠堂をこね上げる)」と見える。

(四)八難…仏を見ず、仏法を聞くことができない境地が八種あるのをいう。地獄・餓鬼・畜生・長壽天・邊地・盲聾瘡癰・世智辯聰・佛前佛後である(『広説』)。

(五)三災…「災」は「災」の異体字。大小の三災がある。世界は成劫・住劫・壞劫・空劫の循環からなるが、小三災は住劫で起こる刀兵災・疾疫災・飢饉災をいい、これによって人々が滅びる。大三災は壞劫で起こる火災・水災・風災をいい、これによって世界が滅びる(『広説』)。

(六)地獄應為如開：P2319(甲)と杏雨羽071は「地獄應當為汝開」とする。七言句であるべきであり、「當」は脱落と見るべきであろう。「如」も意味から考えて、音の近似ゆえに「汝」を誤ったものと思われる。

《散文》

S2614(原)：目連承仏威力、騰身(ト)向下、急如風箭、須臾之間、即至阿
P2319(甲)：目連承仏威力、騰身向下、急如風箭、須臾之間、即至阿
杏雨羽071：目連承仏威力、騰身向上、急如風箭、須臾之間、即至阿

鼻地獄。空中^(二六) 見 五十箇牛頭馬腦、羅刹夜叉、牙如劒樹、口似血盆、鼻地獄。空中 見 五十箇牛頭馬腦、羅刹夜叉、牙如劒樹、口似血盆、鼻地獄。空中^(二七) 見^(二八) 五十箇牛頭馬頭、夜叉羅刹、身如劒樹、口似血盆、

聲如雷鳴、眼如掣電、^(二九)×向天曹當直。^(三〇)逢著目連遙報言×、「和尚莫來。聲如雷鳴、眼如掣電、×向天曹當直。逢著目連遙言×、「和尚莫來。聲若雷鳴、眼如電掣、上向天曹當直。逢著目連遙報言曰、「和尚莫來。

此間不是好道、此是地獄之路。^(三一)西邊黑煙之中、惣是獄中毒氣、吸著和

此間不是好道、×是地獄之路。西邊黑煙之中、惣是獄中毒氣、吸著和××不是好道、此是地獄之路。西邊黑煙之中、惣是獄中毒氣、吸著和

尚化為灰塵」處。^(三二)

尚化為灰塵」處。

尚化為粉碎」×。

【現代語訳】

目連は仏の威力を承け、身を躍らせて下へと向かい、その早きこと風に乘る矢の如し。たちまちうちに、はや阿鼻地獄に着きました。空中にて見れば五十人の牛頭馬頭、羅刹夜叉が、齒は劒の樹の如く、口は血の池の如く、声は雷鳴の如く、眼は稲妻の如く、天曹にて勤務に当たっております。目連に出会々と遠くから申します。「御坊は来られますな。ここはよい道ではありません。ここは地獄への道ですぞ。

西の黒煙の中は、すべて地獄の毒気で、吸えば御坊は灰塵と成り果てますぞ」というところ。

【注】

(二七) 風箭…風を矢にたとえる表現としては、後世のものではあるが、蘇轍「舟次大雲倉回寄孔武仲」詩（『欒城集』）「上海古籍出版社一九八七年」卷十）に「君帆一何駛、去若乘風箭（あなたの舟の帆は何と速いのか、まるで風に乗る矢のように遠ざかる）」と見えるほか、かなりの用例がある。

(二八) 空中見…杏雨羽「」はこの部分が判読困難である。「空中」らしい文字は読み取れるが、その下は■であり、おそらく「見」を書くうとして書き損じて消したものと推定される。その下、「五」の上には「見」のような字が二つ記されている。

(二九) 牙如劒樹、口似血盆…『五燈會元』卷七に「至來日、龍潭陞座謂衆曰、可中有箇漢、牙如劒樹、口似血盆（翌日になると、龍潭は座に上がり、みなに言った。「ここに男がいる。齒は劒の樹の如く、口は血の池の如し）」とあるように、仏教関係の書物を中心に定型表現として用いられ、特に口を「血盆」にたとえる例は、『水滸傳』第一回をはじめとして、白話小説などに数多く認められる。血盆は、元來祭祀の際に生け贄の血を入れる鉢のことだが、ここでは血の穢れゆえに血の池地獄に墮ちる女性の救済を扱った『血盆經』の影響があるかとも思われる。ただ、『血盆經』の成立時期は不明であり、この頃に存在したかは定かではない。誇張表現であることを考慮して、とりあえ

ず「血の池」と訳しておく。

(三〇)眼如掣電…『佛説觀佛三昧海經』卷五に「阿鼻地獄……於其四角有四大銅狗。其身廣長四十由旬。眼如掣電、牙如劍樹、齒如刀山、舌如鐵刺(阿鼻地獄は、……四隅に四頭の巨大な銅の犬がいる。長さ幅は四十由旬、眼は稲妻の如く、奥歯は劍の樹の如く、前歯は刀の山の如く、下は鉄のトゲの如し)」と、阿鼻地獄の銅犬の形容として見える。

(三一)向天曹…杏雨羽071は「上向天曹」とする。「向」は場所の前に置かれる前置詞であり、前に「上」が存在する必然性はない。「天曹」ゆえ「上」ということで附加されたか。

(三二)還報言…P2319(甲)は「報」を欠く。意味上問題はないが、ある方が七言句の形になってリズムがよいため、脱落の可能性が高いものと思われる。杏雨羽071は「報言」の後に「曰」がある。ここまでの「報言」の例を見ると、㊶と㊷の二例以外はすべて後に目的語を有しており、この語は直接セリフを導くことではないという意識ゆえに「曰」を附け加えた可能性が想定される。これまでの「報言」は返事をするものであったが、㊶は異なる。「葉浄能詩」(S6836)に「張令妻即再喘息、報言夫……(張令の妻はすぐに生き返り、夫に言うには……)」とあるように、単に告げることを意味する語としても「報言」が用いられるようである。

(三三)此間不是好道。此是地獄之路…P2319(甲)は「此間不是好道、是地獄之路」杏雨羽071は「不是好道、此是地獄之路」とする。S2614(原)と同じ本文をもとに、「此」の重複を避けるため、それぞれ手を

入れた結果か。「好道」はよく分らない。「地獄之路」との関係から考えて、単純に「よい道」と訳しておく。

(三四)化為灰塵處…杏雨羽071は「化為粉碎」とする。ともに意味は通るが、異同が生じた原因はよく分らない。この語をはさんで続くうたも羅刹のせりふであり、「化為灰塵」の説明ではない。この点からすると、「處」は単なるうたの始まりを示す(もしくは絵を示す)記号か。

《唱》

S2614(原)：和尚不聞道×阿鼻地獄^(三七)、鐵石過之皆得殃。地獄為言P2319(甲)：和尚不聞道×阿鼻地獄、鐵石過之皆得殃。地獄為言杏雨羽071：和尚可聞道道阿鼻×獄、鐵石過之皆得殃。地獄為言

何處在、西邊怒那^(三八)×黑煙中。目連念仏若恒沙、「地獄元來是我家。」何處在、西邊怒那煙^黑中。目連念仏若恒沙、「地獄元來是我家。」何處在、西邊×那箇黑煙中。目連念仏恒沙、「地獄元來是我家。」

拭淚空中遙錫杖、鬼神當即倒如麻。白汗交流如雨濕、昏×迷不覺拭淚空中遙錫杖、鬼神當即倒如麻。白汗交流如雨濕、昏中迷不覺試淚^マ空中遙錫杖、鬼神當即到如麻。白汗交流如雨濕、昏×迷不覺

嘘^ヒ自嗟。手中放却三楞棒、臂上遙拋六舌叉。如来遣我看慈母、自嘘嗟。手中放却三楞棒、臂上遙拋六舌杈。如来遣我看慈母、

自嘘嗟。手中放却三楞棒、臂上遙抛六舌叉。「如來遣我看慈母、

阿鼻地獄救波吒^(四)。」目連不住騰身過、獄卒相看不敢遮。

阿鼻地獄救波吒。」目連不住騰身過、獄卒相看不敢遮。

阿鼻地獄救波吒。」目連不住騰身過、獄卒相看不敢遮。

【現代語訳】

御坊は阿鼻地獄のことを聞いておられぬか、鉄も石もここに来ればみな無事ですまぬ。地獄はどこにあると思っておられた。西の色濃い黒煙の中じゃ。」目連は仏の名をとなえること真砂の数の如く、「地獄こそは我が家であつたか」と、涙ぬぐって空中に錫杖を振れば、鬼神はたちまち麻の如くに倒れる。冷や汗は激しく流れて雨に濡れたよう、意識はなくなりひとりのため息つくばかり。手から三角の棒を離し、腕からは六股の叉が遠くなげうたれる。「如來は私に母を見舞って、阿鼻地獄にて苦難を救えとされたのじゃ。」目連が留まらず身を躍らせて通れば、獄卒は見ているばかりで止める勇氣もない。

【注】

(三五)和尚不聞道阿鼻地獄…杏雨羽071は「和尚可聞道道阿鼻獄」とする。他の二本の本文では七言句にはなり得ないため「可聞道道阿鼻獄」で七言句を形成するように改めたか。

(三八)怒那…蔣禮鴻は「王昭君變文」(P2553)に「祁雍更能何處在、只應弩那白雲邊(祁山雍州いづくにありえよう、「弩那」なる白雲の

あたり)」をあげて、「弩那」に同じとして、「盛多濃厚貌」とする。

(三七)遥錫杖…「遙(遥)」は「搖」の誤りか。

(三八)當即…「王昭君變文」(P2553)に「漢使吊訖、當即使廻(漢の使者は弔い終えると、すぐに使者は帰った)」とあるように、「當」のニュアンスは少なく、「すぐに」という方向で用いられるようである。

(三九)白汗交流…白汗は冷や汗のこと。「戰國策」卷一七「楚策四」に「夫驥之齒至矣、服鹽車而上太行、蹄申膝折、尾湛附潰、漉汁灑地、白汗交流(名馬が年老いて、塩の車を牽いて太行山を上るとなると、ひづめは伸びて膝は折れ、尻尾も肌もぐしょぐしょで、引き出す汗は地に注ぎ、冷や汗がだらだら流れる)」と見え、定型表現化したようである。

(四〇)六舌叉…「叉」はすでに出了ように、トライデントの類の武器。

「舌」は通常鐘などの中に吊して音を出す金属の棒や笛のリードなどに用いられるが、突起状のものを指すこともあり、ここでは刃が六本突き出していることかと推定されるが、他に同様の例は見当たらない。

(四一)波吒…苦難のこと。「拾得詩」第五首に「死後受波吒、更莫稱冤屈(死後に苦しみを受けても、理不尽とは言うまいぞ)」、「目連縁起」(P2193)「放捨阿娘生淨土、莫交業道受波吒(母を救って淨土に生まれさせ、善惡の報いとして苦しみを受けさせない)」など。

(小松)

15

《散文》

S2614(原)：目行連前⁽¹⁾、至⁽²⁾地獄。相去一百餘步、被火氣吸著⁽³⁾、而欲
 P.2319(甲)：目連前行、至一地獄。相去一百餘步、被火氣吸着、而欲
 杏雨羽071：目連前行、至一地獄。相去一百餘步、即火氣吸着、而欲

仰倒。其阿鼻地獄、且×鐵城高峻、莽蕩連雲。××××××××××

仰倒。其阿鼻獄、且×鐵城高峻、莽蕩連雲。此中惡事、說不可盡⁽³⁾。

仰倒。其阿鼻^地獄、且得鐵城高峻、奔蕩連云。××××××××××

劒戟森林^(四)、刀槍重疊。劒樹千尋以芳撥、針刺相楷^(五)。刀山万仞×横連^(六)、

×××

劒戟森林、刀槍重疊。劒樹千尋^以、傍撥、針刺相楷。刀山万刃^以横連、

讒岳乱倒^(九)。猛火掣⁽¹⁰⁾似⁽¹¹⁾裏吼⁽¹²⁾、眇跟滿天。×劒輪族⁽¹³⁾似⁽¹⁴⁾星明、灰塵摸地^(四)。

×××

剋岳乱倒。猛火掣^似雷吼、跳跟滿天。■劒輪族^似星明、灰塵摸地。

鐵蛇吐火^(五)、四面張鱗。銅狗吸煙^(六)、三邊振集^(七)。

×××

鐵蛇吐火、四面張鱗。銅苟吸烟^マ、三邊振■^吸。

【現代語訳】

目連は進んで行き、とある地獄に至ります。百歩あまり離れた所で、熱氣を吸い込み、倒れそうになります。そもそも阿鼻地獄は、なんと鉄の城が高く聳え立ち、空の果てで雲に連なっております。(守兵の)劒や戟が高く密に生い繁り、刀や槍が重なり合っております。劒樹が遙か遠くまで寄り添い合っており、針の葉が鋭く尖っており互いに擦れ合っております。刀山が数キロも横に連なり、高く険しい峰が無秩序に逆立っております。猛火が勢いよく燃え上がり雷鳴のよう、跳びはねて天に満ちます。劒輪が集まり揃って星明かりのよう、灰塵と化して地に落ちて満ち満ちています。鉄の蛇が火を吹き、四方八方から鱗をきらめかせ、銅の犬が煙を吸い、三方から体を震わせて吠えております。

【注】

(一)目行連前：本来はP.2319(甲)と杏雨羽071のように「目連前行(目連は前へ歩いて行く)」と作るべきという、S2614(原)は「目行連前」と書き損じ、「行」字と「連」字の間に倒置記号「乙」を附す。しかし「行」と「連」を倒置させると「目連前行(目連は前列に行く)」となり、文意が通じない。これについて『校注』は、「行」と「連前」を倒置させるべきであるとみなし、「敦煌寫本中誤倒字多用鈎乙符、但應鈎乙的字數竝無一定之規、宜據文意判斷(敦煌の写本では誤って倒置させた字には多く鈎乙の符号を用いるが、鈎乙にかかる字数には決して一定の規律は鳴く、文意に応じて判断すべきである)」と言いつ。

(二)被火氣吸著：「被」は被害のニュアンスを示す兼語動詞で、直訳

は「熱氣を吸わされて」、意識は「熱氣を吸って」。或いは「被」を受動の助詞ととって「熱氣に吸い寄せられて」とも訳せる。

(三)此中惡事、説不可盡：S2614(原)と杏雨羽071では長々と阿鼻地獄の様子が描写されるが、P2319(甲)は「此中惡事、説不可盡(この中の惡事は、言い尽くすことができぬ)」という一文に作る。「惡」は「惡」の俗字(『玉篇』卷八「心部第八十七」：「惡：於各切、不善也、又烏路切、憎惡也。惡：同上、俗」)。

(四)劒戟森林：「森林」という語の用例は少ないが、唐代に蔡希寂の「同家兄題渭南王公別業」詩(『全唐詩』〔中華書局一九六〇年〕卷一一四)に「素暉射流瀨、翠色綿森林(日月の輝きが淺瀨の水を照らし、綠色が綿々と高く密に生い繁る)」の例がある(「森」は樹木が高く生い繁る、「林」は密集するの意と解釈)。また時代は下るが、明の李時勉撰『古廉文集』(四庫全書本)卷十一「曉發沙城由東山問道薄暮始達宣府」に「旌旗蔽雲日、劒戟森林鬱(旗は雲と日を覆い、劒と戟は高く密に生い繁る山のように)」という類似表現が見られる。故に句全体は「劒や戟が高く密に生い繁り」と訳出した。『校注』は、「森林」は「森森」(樹木が生い繁っているさま、多いこと)の誤とみなす。

(五)以芳撥：S2614(原)は「以芳撥」、P2319(甲)は前後省略、杏雨羽071は「^以芳撥」と作る。まずS2614(原)の「以芳撥」について、「以」(以て)は順接の「則」而に同じ、「芳」はふつう香りの意だが文意が通らないため「旁(近づく・寄り添う、あまねく)」の誤字とみなし、「撥」は「ぶつかり合う・擦れ合う」の意(「撥」の用例には唐の岑參「走馬川奉送出師西征」詩〔岑參詩集編年箋註〕、巴蜀書

社一九九五年)の「半夜軍行戈相撥、風頭如刀面如割〔深夜に軍が進み戈が互いに擦れ合う、刀の如き風に顔が割かれるよう〕」、宋の李昉ら撰『太平廣記』卷二四八「詠諧四、山東人」の「道邊樹有齧捨者、車撥傷〔街路の樹に瘤があるのは、車がぶつかった傷だ〕」がある」と解釈し、訳は「(劒樹が遙か遠くまで)寄り添い合ってぶつかる」とした。杏雨羽071の^以「^以芳撥」も、「傍」は近づくの意、「撥」は「綴(連なる)」に通じ(12注(八)「綴」参照)、同義となる。ちなみに『敦煌變文集』は「以(似)芳撥」と翻字し、下の句「針刺相楷」に続けて読むが、解釈は不明。『校注』は、「袁賓謂「芳撥」應讀作「旁魄」、廣大・大被義、亦是一說(袁賓は「芳撥」を「旁魄」と読むべきとしており、廣大・絶えず続くの意で、一理ある)」と言う一方で、以下の如き持論を展開する。「撥」は「發」の増旁字で(例として敦煌本句道興撰『搜神記』〔敦煌變文集〕王景伯の條の「時太守死女聞琴聲哀怨、起屍聽之、來於景伯船外、發弄釵釧(時に太守の死んだ娘は琴の音の哀しげ恨めしげなのを聞いて、死体を起こしてこれを聴き、景伯の船の外にやって来て、釵と腕輪を手で弄んだ)」に見える「發弄(手で弄ぶ)」の語はふつう「撥弄」と作るとする)、「此處以樹劒、〔芳發〕指枝葉之生長發生、蓋以劒刀劍之密集也(この箇所は樹木で以って刀や劒を喩えているのであり、「芳發」は枝葉が生長して育つことを指し、刀や劒が密集しているさまを喩えるのであろう)」。しかし、「芳發」はふつう「香りを放つ」の意であり、「植物が生長して育つ」の意は無い。

(六)針刺：「刺」は「刺」の俗字(宋の陳彭年ら撰『廣韻』卷四去聲「五

眞」・「刺：針刺……。刺：俗」。いゝでは「針」は針でできた葉、「刺」はそれが鋭く尖っているさまを言うか。

(七) 楷：「楷（法式・典範、やり方に則る）」では文意が通じない。徐震堦校（「敦煌變文集校記再補」『華東師大學報・人文科學』一九五八年二期）は「楷（ともに居る）」に通ずるとみなが、本訳中では「校注」に従い、写本中に常見される木偏と手偏の混同で、「楷（擦る）」に通じるとみなす。

(八) 刀山万仞×横連：上四字について、S2614(原)は「刀山万仞（刀山が数キロ）」と作り（「仞」は古代の長さの単位で、七尺を一切、一説に八尺を一切とする）、杏雨羽071は「刀山万刃（刀山の一万本の刃）」と作る。また下二字について、S2614(原)が「横連」とする所を、杏雨羽071は「^以横連」（「以」は小字の傍注）と作り、前々句「劍樹千尋^以傍接」との対句と捉えていることがわかる。

(九) 讒岳：「岳」は「巖（岩）」の異体字。S2614(原)の「讒岳」は同音の「巖岳（高く険しい峰や崖）」の誤であろう。杏雨羽071の「剋岳」は用例が見当たらないが、文字通り、たたき切ったり削ったかのような峰や崖の意か。

(一〇) 掣燄：S2614(原)は「掣燄」、杏雨羽071は「掣炎」と作る。まずS2614(原)「掣燄」にひいて、「掣」はいゝでは「疾く進む・疾く飛ぶ」の意、二字目は「淡」字に見えるが「炎」の訛字と思われる。「掣炎」の用例は見当たらないものの、「疾く燃え上がる炎」と解釈される。杏雨羽071「掣炎」の一字目は「吉＋ワ冠＋手」という字書類にも見つからない字で、「掣」の訛字とみられる。ちなみに蔣禮鴻

(二五〇・二五一頁)はS2614(原)を「掣浚」と判読し、「浚」通用作「峻疾」的「峻」（「浚」は「峻疾〔速い〕」の「峻」と通ずる）」とする。「校注」もこの説をとって解釈を補うが、テキストを見る限り、「浚」字には見えない。

(一一) 震吼：二字目、S2614(原)は「震」という字に見えるが、字書類に見当たらない。杏雨羽071は「雷」と作る。項楚校と『校注』はS2614(原)「震吼」を「雷吼（雷鳴の轟き）」の訛と断じ、「雷吼」の語は「韓擒虎話本」(S2144)に「當時便射、箭既離弦、世同雷吼（その時すぐさま射れば、矢は弦を離れ、勢いは雷鳴の如し）」と用例があることを指摘する。しかし、S2614(原)にはこの直後に「震煙」という語が見え（[16]参照）、こちらは「雷」の訛字とみならず文意が通らない（杏雨羽071は「雲煙〔雲霧の意〕」と作る）。蔣禮鴻校（二五〇・二五一頁）は「震吼」を「震吼（怒号の意）」とみなが、後出の「震煙」の方は「震煙」と読むと文意が通じない。またS2614(原)の抄写者は、他の箇所では「雷」（或いは「雲」）の字を正確に書いており、「震」字は別字の意識で書いている可能性があるが、詰まる所、何の字の訛字かは断定し難い。それ故に杏雨羽071の抄写者も、各々文脈に沿って「雷」「雲」と作ったものと推定される。現段階では「雷吼」とみなして訳出したが、さらなる考証を俟ちたい。

(一二) 跳跟：S2614(原)は「跳跟（跳）」は大いに泣く、「跟」は跳びはねるの意）、杏雨羽071は「跳跟（跳び上がる）」と作る。S2614(原)では文意が通らず、字形の相似による訛字と見られる。

(一三) 簇と：「簇」は集まり揃っているさまの意（宋の丁度ら撰『集韻』

××× ×××× ×××× ×××× ×××××
 人之背。鐵杷蹕眼、赤血西流。銅叉刺膏、白膏東濺。於是刀山入爐

炭、^(四)髑髏碎、骨肉爛、筋皮折、手膽斷。碎肉迸濺於四門之外、凝血滂

×××× ×××× ×××× ××××××××××××××××
 炭、髑髏碎、骨穴爛、筋皮折、肝膽斷。碎肉迸濺於四門之外、凝血滂

沛於獄牆之畔。^(五)聲嘶叫天、岌と汗と。雷震^(六)地、隱と岸と。^(七)向上雲煙、

××××××××××××××××××××××××××××××××
 沛於獄牆之半。^(八)聲豪叫天、岌と汗と。雷震動地、隱と岸と。向上雲煙、

散と漫と、向下鐵鏹、撩と乱と。箭毛鬼嘸嘸と竄と、銅背鳥咤と叫と

××××××××××××××××××××××××××××××××
 散と漫と、向下鐵鏹、撩と乱と。箭毛鬼嘸と竄と、同力鳥咤と叫と

喚。^(九)獄卒數萬餘人、惣是牛頭馬面。饒君鐵石爲心、久得亡魂膽戰處。

××××××××××××××××××××××××××××××××
 喚。獄卒數萬餘人、惣是牛頭馬面。饒君鐵石爲心、亦得亡魂膽戰處。

【現代語訳】

まさびしが空中から乱れ降り、男の胸をつらぬきます。きりが天上から横ざまに飛んできて、女の背に突き刺さります。鉄の熊手が目を突き刺し、赤い血が西へ流れます。銅のさすまたが腰をへし折り、白

い脂が東へ流れます。そして刀の山に登り、炉の炭火の中に入れられ、髑髏は碎け、骨や肉はただれ、筋や皮は切れ、手や胆はちぎれます。碎けた肉が四方の門の外までほとばしり、凝固した血が地獄の壁のはたに溢れます。叫び声をあげて天に訴え、その声が高々と満ちみちています。雷が地を揺り動かし、ごろごろと鳴り響きます。上では雲と霞がいつぱいに広がり、下では鉄の斧が入り乱れます。矢のような毛を生やした鬼がせかせかと走り、銅のくちばしを持つ鳥がギヤギヤアとわめきます。獄卒數万余人は、すべて牛頭馬頭です。たとえあな

【注】

(一) 曾…「胸」の異体字。杏雨羽「」は音通で「兎」に作る。前出註(一)「兎」参照。

(二) 蹕…このままだと足で踏みつける意だが、項楚は「卓」の通用とし、その場合は打ち叩く意味での用法がある。『校注』はさらに「蹕」「卓」ともに「築」に通じるといい、この場合、打つ、突くなどの意味がある。あるいは突き刺すことを意味する「戳」の音通とも考えられ、『宋史』刑法志(中華書局一九七七年)に「蘇州民張朝之從兄以槍戳死朝父、逃去(蘇州の民張朝のいとこが槍で朝の父を刺し殺して逃走した)」との例が見える。文脈を考慮し、突き刺す意味で訳した。

(三) 膏…「腰」の異体字。

(四) 刀山入爐炭…『校注』は「刀山」の上に「上」字が脱落している

であろうという。今この方向で動詞を補って訳す。地獄の描写として類似するものに、『佛説菩薩本行經』卷下「地獄之中火燒湯煮、刀山劍樹火車爐炭（地獄の中は炎が燃え熱湯がたぎり、刀の山に劍の木、火の車に炉の炭火）」などがある。

(五) 碎肉迸濺於四門之外、凝血滂沛於獄牆之畔…地獄はしばしば四方に門をそなえた城壁都市としてイメージされ、たとえば『長阿含經』卷一九には「其大地獄縱廣百由旬、下深百由旬。爾時世尊即說偈言、四方有四門、巷陌皆相當。以鐵爲獄牆、上覆鐵羅網（その大地獄は縱横百由旬、深さ百由旬。この時世尊さつそく偈を唱えて言われるには、「四方に四つの門あり、道路みな通ず。鉄もて獄の壁となし、上は網もて覆う」という。

(六) 雷震^雷地、隱^震と岸と…S2614(原)では「震」と思われる字の左半分が欠損しており、右下に「震」字が書き込んである。前後のつながりからいって四字句であるべきところであり、杏雨羽^〇に従い「動」を補って訳した。「岸岸」はこのままでは意味が通じない。「暗暗」の音通で、上の「隱隱」と同様に雷鳴の擬音か。

(七) 向上雲煙、散と漫と…「向」は場所を表す介詞の用法。

(八) 向下鐵鏹…「鏹」は金属が触れあう音を表す擬音語などに用いられる字。大斧を意味する「鏹鉞」という語があることから、鉄の斧として訳した。本訳注^四に、目連が母を捜して諸地獄を巡り歩く場面にも「鐵鏹万劍安其下（鉄の斧と一万の劍がその下に備え付けてあり）」の表現がある。

(九) 箭毛鬼嘍嘍と竄と、銅髻鳥咤と喚…「聲號叫天、岌と汗と」以

降、ここまで対句を連ねて押韻していることから見て、S2614(原)で

「叫」の下にある踊り字は誤りであり、杏雨羽^〇と同じ「咤咤叫喚」からの誤写と思われる。「嘍嘍」（杏雨羽^〇）では「嘍嘍」（「竄竄」の意味は分明でない。「嘍嘍」は鳥の鳴き声を表す擬音語にも用いられるが、ここでは文脈からしてともに動作を表す擬態語であり、「竄」が逃げ隠れるとか放逐する意味を持つことから推測して訳した。「咤咤」は喘鳴などを表す擬音語。「髻」は「嘴」の異体字。「箭毛鬼」の例としては、『大般涅槃經』卷一六に「以針刺箭毛鬼身……（針もて箭毛鬼の身体に刺し……）」の表現が見える。「銅嘴鳥」は他に例が見あたらないが、前出注（八）「向下鐵鏹」で言及した地獄巡りの場面に、「銅鳥万道望心撒」の句がある。前出^四注（七）「銅鳥」参照。また、似た表現として「鐵嘴鳥」の例が見られる。『長阿含經』卷一九「時劍樹上有鐵嘴鳥、啄頭骨壞啖食其腦（その時劍の木の上では鉄の嘴を持った鳥が、頭の骨をつつき脳を食いあさる）」など。あるいは「鳥」でなく「鳥」か。「復有鐵嘴鳥、深啄於髓腦（また鐵の嘴の鳥がいて、髓を深々とついばむ）」（『大寶積經』卷九七）、「有炎嘴鳥而啖食之（炎の嘴の鳥がいてこれを食らう）」（『正法念處經』卷七）、「金剛嘴鳥、有金剛爪先、食其足（金剛石の嘴の鳥は金剛石の爪先を持ち、その（罪人の）足を食らう）」（同卷一〇）など様々な例がある。杏雨羽^〇の「同力鳥」は鳩の別名。『太平實字記』卷一五七嶺南道・広州・信安県に「雲白鳥、一名曇鳥、亦名同力鳥。千歲爲化爲鳩（雲白鳥は一名を曇鳥といい、また同力鳥ともいう。千年を経ると化して鳩となる）」（南昌萬氏嘉慶八年序刊本）という。「銅嘴鳥」に違和感を覚え改変したか、

あるいは「銅」の音通のつもりで「同」を書き、そのまま誤って「同」で始まる鳥の名を書いてしまったものか。

(大賀)

17

《唱》

S.2614(原) … 目連執錫向前聽、為念阿鼻意轉盈。一切獄中皆有
P.2319(甲) … 目連執錫向前聽、為念阿鼻意轉盈。一切獄中皆有
杏雨羽071 … 目連執錫向前聽、為念阿鼻意轉盈。一切獄中皆有
BD00876(戊) … □□□□□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□

息、此箇阿鼻不見停。恒沙之衆同時入、共變其身作一刑。忽若无^(五)人
息、此箇阿鼻不見停。×××××××× ×××××××× ×××××
息、此箇阿鼻不見停。恒沙之衆同時入、共變其身作一形。忽若無人
□ □

獨自入、其身^(六)滿鐵圍城。案^(七)と難^(八)と、板鐵吸^(九)爰雲空^(一〇)。轟^(一一)と鏘^(一二)
××× ××××××× ×××× ×××××××× ××××××××
獨自入、其身亦滿鐵圍城。案と難と、板鐵吸^(九)爰雲空半。轟と鏘
□ □

と、枯地雄^(九)×××× 長蛇咬^(一〇)と三曾黑、大鳥崖柴^(一一)兩翅青。万道
× ×

と、枯地雄雄^(一)宗雷聲。長蛇咬^(二)と三曾黑、大鳥崖柴^(三)兩翅青。万道
□ □

紅爐扇^(四)廣炭、千重赤炎迸流星。東西鐵鑽^(五)讒凶^(六)、左右銅鉸^(七)石眼精^(八)。
××××× ××××××× ×××××××× ××××××××
洪爐扇廣炭、千重赤炎迸流星。東西鐵鑽^(五)讒凶^(六)、左右銅鉸^(七)射眼精。
□ □

金鏘^(一)乱下如風雨、鐵計^(二)空中似灌傾。哀哉苦哉難可忍、更交腹^(三)背^(四)下
×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××
金鏘^(一)乱下如風雨、鐵計^(二)空中似灌傾。哀哉痛哉難可忍、更交腹^(三)背^(四)下
□ □

長釘。目連見以×唱其哉、專心念仏幾千迴。風吹毒氣遙呼吸、
×× ×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××
長釘。目連見以口唱音哉、專心念仏已千迴。風吹毒氣遙呼吸、
□ □

看者身為一聚灰。一板黑城^(一)開鏘落、再板明門^(二)兩扇開。目那連邊^(三)
×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××
看者身為一聚灰。一板黑城^(一)開鏘落、再板明門^(二)兩扇開。目連那邊^(三)
□ □

偈未喚、獄卒擎叉便出來。^(二七)「和尚欲覓阿誰消息。其城廣闕万由

旬未喚、獄卒擎叉便出來。^(二八)「和尚覓阿誰息道。其城廣闕万由

旬未喚、獄卒擎叉便出來。^(二九)「和尚覓阿誰息道。其城廣闕万由

旬、卒倉没人開門得。^(三〇)刀 釵晶光阿點と、受罪之人愁惱と。^(三一)

旬、倉卒没人開門得。刀 釵晶光阿點と、受罪之人愁惱と。

旬、倉卒没人開門得。刀 釵晶光阿點と、受罪之人愁惱と。

大火終融滿地明、煙霧滿と悵天黑。^(三四)忽見 梨於此立、又復從來

大火終融滿地明、煙霧滿と悵天黑。^(三五)忽見 梨於此立、又復從來

大火終融滿地明、煙霧滿と悵天黑。^(三六)忽見 梨於此立、又復從來

不相識。縱由算當×更無人、應是三寶慈悲力。^(三六)

不相識。縱由竿當便更無人、應是三寶慈悲力。^(三七)

不相識。縱由竿會×更無人、應是三寶慈悲力。^(三八)

不相識。縱由竿當×更無人、應是三寶慈悲力。^(三九)

【現代語訳】

目連が錫杖を手に執り前に進み出て（亡者たちが絶えず叫喚するさまを）聴けば、阿鼻地獄の苦しみを思いいよいよ胸がいっぱいになる。

どんな地獄にも休息があるものを、この阿鼻地獄には休まる時もない。無数の亡者たちが同時に入ってくると、その身を一つに変え、もしも

誰もおらず一人きりで入ってくるならば、その体もまた鉄圍城いっぱいに満ちみちる。ぐるりぐるり、と鉄を振るえば雲を貫き空の半ばに達するほどに高々と。ドンドンシャンシャン、と盛んに大地を奮わせ

雄宗と響くは雷の音。大蛇はきらめく三層の黒、大鳥はまなこをいからせ両翼は青。万筋にものびる紅い炬に風が吹き寄せればぶわっと灰

が広がり、千重の赤炎は流星を迸らせる。東西から鉄の錐鑽が胸筋を突き刺し、左右から銅のはさみが勢いよく放たれ目玉を貫く。金を溶

かした汁は嵐のように乱れ降り注ぎ、鉄を溶かした汁は空中より灌頂のように頭のとっぺんに注がれる。哀しきかな苦しきかな、とても見

るに耐えない有様、更には互い違いに腹と背を上から下へ長い釘で串刺しにされる。目連が目にしたその有様を唱え、一心に念仏すること

数千回。風が吹き寄せた毒気を遙かに吸えば、みるみるうちに身体は一山の灰になってしまふであらう。錫杖を一振りすると鉄城の門の鎖

が落ち、二振りすれば冥途の門が観音開きに開く。目連がその場において呼びかけないうちに、すぐに獄卒がさすまたを手に現れる。「和尚

様はどなたの行方を尋ねておいででしょう。鉄城の広き門は万由旬、おいそれと開け閉めできるはずはございません。刃の光はきらきらと

輝き、罪人たちの愁いはぶつぶつと連なります。大火は大地に溢れ満ち、煙と霧は空を真っ黒に覆っております。ところがふと見るとお

坊様が立つ姿、しかもこれまで存じ上げぬ方。足取りから考えるには更にお連れの者もなくひとりきり、これはきつと三宝のご慈悲の力で

しょう。」

【注】

(一) 向前…前に進み出る。「向」は至るの意、あるいは介詞「在(〜で)」と同義。前出[5]注(一四)「向」および同注(一五)「向前」参照。「向前」の二字は敦煌出土文献に多出し、前へ進み出て何事かを申す時に使われる。目連変文の中にも同様の用法が散見するが、ここでは「聴(聞く)」という動作が導かれている。

(二) 為念…思う、考える。敦煌変文では他に「葉浄能詩」(S.6836)の「浄能曰、道之法門、不將致物為念、不求色慾之心、不貪榮貴、唯救世間人疾病、即是法門。(浄能が言うには、道家とは、物を手に入れることを考えず、色欲を求めず、富や繁栄を貪らず、ただ世の人々の病を救うもの、これが道家というものだ)」に例がある。

(三) 恒沙之衆同時入〜煙霧滿帳天黒…P.2319(甲)にない。この点について、P.2319(甲)で阿鼻地獄の描写が不要と判断され省略されている可能性と、S.2614(原)および杏雨羽V1では本来なかった描写が加えられた可能性の二通りが推測できる。目連変文全体を見ると、P.2319(甲)では本文の省略がしばしば行なわれている。このことから、ここでも前者の可能性が有力か。

(四) 刑…『校注』では「項楚校では「刑」の字は「形」の誤りである」とする。思うに、「形」の字を誤って「刑」に作るのは前後の文にも見られる例であり、項楚が正しい」と述べる。『選注』も「原文の「刑」は「形」に作るべし」とする。本注もこれらと同様の見解。「刑」と「形」

とが通用することについては前出[4]注(一七)「形容大省繪相識」参照。(五) 忽若無人…「忽若」は、もし〜したら、仮に〜したら。「舜子變」(P.2721)「忽若堯王勅知、兼我也遭帶累(もし堯王がお知りになったら、私も巻き添えを食うだろう)」など。「无(無)人」は、誰もいない。王梵志詩「你道生勝死」(二六二)「你道生勝死、我道死勝生。生即苦戰死、死即無人征。(あなたは生は死に勝ると言い、私は死は生に勝ると言う。生きれば苦しみ戦って死ぬが、死ねば出征する者は誰もいない)」(『王梵志詩校注(増訂本)』[上海古籍出版社二〇一〇年])に例がある。

(六) 鐵圍城…仏語「鐵圍山(てつちせん・てちいせん)」の影響を受けた語、あるいは単に鉄でできた城壁に囲まれた城を指す語か。「鐵圍山」は、須弥山を囲む九山八海のうち、最も外側にある鉄でできた山。更にこの外には「大鐵圍山」があり、「鐵圍山」との間に八大地獄があるとも言われる。ここでは前段[5]に既出の「鐵城(鉄の城)」を指す。

(七) 案と難と雄宗雷聲…「案と難と」は管見の限り類例がなく、難解。疊韻語であることから、何らかの擬音語または擬態語と考えられるが、語義は未詳。ここでは「振(振)鐵(鉄を振るう)」、すなわち地獄で用いる鉄の刑具や杖などを振り上げることを形容する言葉と取って訳出した。『校注』は「案と難と振鐵」の部分を「案案難、難振鐵」の三字二句に区切って解し、「案」の字と「難」の字の後、原卷(S.2614)には「重文符号」がある。この二句は難解であり、誤脱があると疑われる」とする。『選注』も『校注』と同様の区切り方をした上で、「ここには誤脱あり、再考を俟つ」としている。しかし、ここは杏雨羽

071の通り、七言の韻文の中に「案と難と、振鐵吸炭雲空半。轟と鏘と枯地雄、雄宗雷聲」の四言、七言、七言、四言（または本注の原文で示したように「案と難と、振鐵吸炭雲空半。轟と鏘と、枯地雄雄宗雷聲」の四言、七言、四言、七言）の長短句が挿入されている部分であると解すべきである。これは唐代伝奇や歌行などに見られるパターンであり、杏雨羽071はこうした長短句の混入の痕跡を正しくとどめていると推測できる。一方、S2614(原)の記載は「案と難と振鐵、吸炭雲空、轟と鏘と枯地雄」となっている。この表記の形式から判断すれば、前後と同様に七言を基調とした韻文として解したと推測できるものの、脱字があり、六言、四言、七言となっている点から混乱があるか。杏雨羽071に見られる「半」について、S2614(原)とは「空」が「雄」と韻を踏んでいると判断して意図的に書き落とした可能性がある。訳には杏雨羽071の本文を反映した。

(八)吸炭：管見において用例が見えない。『校注』は「吸炭は「炭炭」とすべきか」とする。「炭炭」は高いさまや、危険が迫るさま、急疾なさま。当該箇所が「炭炭」であると仮定すれば、[6]に既出の「聲驕叫天、炭と汗と（叫び声をあげて天に訴え、その声が高々と満ちみちています）」や後出「如山炭炭雲中出（山の如く高々と雲の中より出てまいります）」より、高いさまを言うと考えられ、文脈とも一致する。訳文もこの解釈に従った。

(九)括地：『校注』は「括は、原卷(S2614)によれば木偏だが、項楚は「括」に作るべきと述べる。「括地」または「刮地」に作り、土煙を巻き上げるがごとき凄まじい勢いでやってくる物音の形容。思うに、

写本の中では手偏と木偏の混乱が見られたため、文脈に鑑みて改めた」とする。「括地」は大地を震わす、揺らすこと。

(一〇)崖柴：「哇噪」または「睚睨」と考えられる。「哇噪」は互にいがみ合い、たたかうさまをいう。蔣禮鴻は、「哇噪」に取り、「くちばしを開き、食らいつこうとする凶暴な狼のようなさま」とし、「犬であれば牙を剥き出しにすること、鳥であればくちばしを開くことか。變文のこの句は未詳」としている。しかし「哇噪」はすべて犬について用いる例であるのに対し、当該箇所では主語が「大鳥」であることから、別案として「睚睨」とも考えられる。目をいからず、睨むの意。「睚睨」に同じ。また「睚眦」とも。『廣弘明集』音釋・廣第十四に「睚眦、舉目相忤貌（睚眦は、目を上げて敵意をもって睨み合うさま）」とある。いづれにせよ「大鳥」の威圧的でおそろしいさまを描写していると思われる。

(一一)扇廣炭：『校注』は「廣」について、原卷(S2614)の字の底部に「八」の構成要素はないが、原録が「廣」ととのに從う。しかし、「廣炭」は解釈が困難で、誤りがあるかとする。『校注』にS2614(原)の「廣」字が下部を欠くというのは、おそらく次に続く「炭」字の冠部分とこの部分とが重なっていることから見落としたものであろう。ここでは原文に従い「廣」にとり、阿鼻地獄に無数に伸びる炬に風が吹き寄せ、その灰が勢いよく広がるさまであると解した。

(一二)讒凶劬：S2614(原)の「讒」はそしる意であり、意味が通じない。杏雨羽071の「劬」は刺す意であり、文脈に鑑みてこちらを採る。『校注』は「鹿」は「筋」の俗字という。

(二三)銅鉸石眼精…「銅鉸」は一般には儀式で用いる祭具であり、地獄で死者を痛めつける道具としては、管見において、仏典等に同一の名称は見えない。仮にはさみと訳したが、あるいは杏雨羽の「射」から考えて箭のようなものか。S2614(原)の「石」は杏雨羽071「射」の通用か誤写であろう。

(二四)金鏘…金を溶かした汁。

(二五)鐵計(汁)…S2614(原)の「計」は「汁」の誤写。鉄を溶かした汁。

(二六)明門…「校注」は「明は「冥」に読みなすべきである。「冥門」と上の句の「黒城」は対であり、どちらも冥途の地獄について言う」とする。本注もこれに従い、「冥門」として解した。

(二七)扱…「仍」の俗字。

(二八)出来…「出来」は唐代の俗語で生まれつき、生まれながらを意味するが(『唐五代語言詞典』)、ここでは「出てくること、あらわれること」の意。出来(しゅつらい)。

(二九)由旬…距離の単位、一説に約七キロメートル。前出¹²注(二九)

「一由旬」参照。

(一〇)卒倉…「卒」は「卒」の俗字。『校注』は「卒倉」を「倉卒」に改める。

(一一)問…「閉」の俗字。

(一二)■釵…S2614(原)は一字を墨で消し、右肩に小字で「刀」と書き入れる。「釵」は「剣」の俗字。

(一三)愁懺と…「懺」の字義は未詳。いわゆるABB型形容詞であり、「愁」の状態を「懺懺」が説明する構造と考えてよいだろう。『選注』

は「愁懺懺」と翻字する。「愁い悔いる」「愁い懺悔する」の意となるか。『校注』は「愁懺懺」と翻字し、「愁戢戢」と校訂する。「戢戢」は密集するさま、また音声が続々としている様子。仮にこちらで訳す。

(一四)終融…「冲融」と音通か。「冲融」は、水などが溢れて広がること。

(一五)愼天…「愼天」は「張天」。空に広がり覆うこと。

(一六)縦由…ここでは⁶に前出の「追放縦由天地邊、悲嗟悔恨乃長嘯(あとを追って天地をあまねくたずねまわり、悲しみ悔やんで長嘆息いたします)」や⁹に見える「可中果報逢名字、放寛縦由亦不難(もし幸いにして母君のお名前を見つかることができたならば、その足跡を捜し訪ねることも難しくないでしょう)」と同様、あしどりと、足跡の意の「縦由」と解した。原字のとおり「縦由(たとえうであらうと)」と解釈すれば、「たとえ更にお連れの者もなく一人きりであったとしても」の意になるか。前出⁶注(一五)「追放縦由天地邊」、⁹注(三一)「放寛縦由」参照。

(川上)

18

《散文》

S2614(原) … 獄主啓言、「和尚、縁×何事開他地獄門。」報言、「貧P2319(甲) … 獄主啓言、「和尚、縁有何事開他地獄門。」報言、「×杏雨羽071 … 獄主啓言、「和尚、縁×何事開他地獄門。」×「貧BD00876(戊) … 獄主啓言、「和尚、縁×何事開他地獄門。」報言、「貧

道不開阿誰開。×××和尚寄物來開。^(三)「獄主問言、^(四)「寄是沒物來開。^(五)」
××××××××××世尊寄物來開。」獄主報言、「寄×甚物來×。」
道不開阿誰開。是貧道和尚寄物來開。」獄主問言、「寄是沒物來開。」
道不開阿誰開。×××和尚寄惣來開。」獄主問言、^(六)「寄是沒物來開。」

目連啓×、「獄主、寄十二環錫杖來開。」獄卒又問、「和尚、緣何事來
目連報日、「××、寄十二環錫杖來開。」獄卒又問、「和尚、緣何事來
目連啓言、「××、寄十二環錫杖來開。」獄主報言、「和尚、緣何事×
目連啓×、「獄主、寄十二環錫杖來開。」獄卒又問、「和尚、緣何事來

至此。」目連啓言、「貧道×阿嬢^(八)× 名青提夫人、故來×訪覓看。」獄
至此。」目連啓言、「×××阿嬢× 名青提夫人、故來×訪覓×。」獄
至此。」目連啓言、「貧道覓阿嬢來、名青提夫人、故來×訪覓×。」獄
至此。」目連啓言、「貧道×阿嬢× 名青提夫人、故來放訪覓×。」獄

主聞語、却入獄中高樓之上、^{(一〇)(一一)(一二)}×^(一三)迢白幡打鐵鼓。^(一四)第一隔中有青提夫人已
主聞語、却入獄中高樓上之、^(一五)×^(一六)迢白幡打鐵鼓。第一隔中有青提夫人已
主聞語、却入獄中高樓×上、手把白幡打鐵鼓。第一隔中有青提夫人已
主聞語、却入獄中高樓之上、×^(一七)迢白幡打鐵鼓。第一隔中有青提夫^(一八)已

否。^(一九)第一隔中無。過到第二隔中、迢黑幡打鐵鼓。第二隔中有青提夫人
否。第一隔中無。過到第二隔中、××××××××××××××××××
否。第一隔中無。過到第二隔中、迢白幡打鐵鼓。第二隔中有青提夫人

否。第一隔中無。過到第二隔中、迢黑幡打鐵鼓。第二隔中有提青夫人

已否。第二隔中已否^(二〇)過無。×^(二一)到第三^(二二)隔中、迢黃幡打鐵鼓。第三隔

××××××××××××××××××××××××××××××
已否。第二隔中××亦×無。過到第三^(二三)隔中、××××××××××××
已否。第二隔中×××××無。過到第三^(二四)隔中、迢黃幡打鐵鼓。第三隔

中有提青夫人已否。久無。過到第四隔中××××××××××××
××××××××××××××××××××××××××××××

×有青提夫人已否。亦無。過到第四隔××××××××××××××××
中有青提夫人已否。久無。過到第四隔中迢黃幡打鐵鼓^(二五)久無。即至第五

隔中間、久道無。過到第六隔中、久道無×青提夫人。

××××××××××××××××××××××××××××××
隔中間、亦道无。過到第六隔中、久道无有青提夫人。

【現代語訳】

獄主は申します、「御坊、なにごとにてかの地獄の門を開かれたのか。」
か。」答えて申します、「私が開けないなら誰が開けましようか。世尊
がお預け下さった物で開けたのです。」獄主はたずねて申します、「い
かなる物を預かって開いたのか。」目連は申します、「獄主様、お預け
下さった十二の環がついた錫杖で開いたのです。」獄主はふたたび尋

ねます、「御坊、なにごとにてここまで来られたのか。」目連は申します、「拙僧の母は名を青提夫人と申しまして、特におたずねしお会いしようと思ったのです。」獄主はその言葉を聞くと、獄中へと戻り高樓の上にて、白い幡をひらめかせ鉄鼓を叩きました。第一の区画の中に青提夫人はおりますでしょうか。第一の区画の中にはおりません。第二の区画の中にやって参りますと、黒い幡をひらめかせ鉄鼓を叩きました。第二の区画の中に青提夫人はおりますでしょうか。第二の区画の中にもおりません。第三の区画の中に着きますと、黄色い幡をひらめかせ鉄鼓を叩きました。第三の区画の中に青提夫人はおりますでしょうか。やはりおりません。第四の区画の中にやって参りましたがやはりおりません。そこで第五の区画の中に着いて尋ねますが、またおりませんと答えます。第六の区画の中にやって参りましたが、またしても青提夫人はおりませんと答えます。

【注】

(一)和尚…訳文では「和尚」を呼びかけの語と取って獄主のセリフに含めたが、「啓言」の目的語と見なし「和尚に言う」とする解釈も成り立つ。あるいはその両方の意を一語が兼ねると見ることも可能。以下同。

(二)阿誰…口頭語で人について尋ねる疑問詞。前出[7]注(二)「阿嬢」参照。

(三)和尚寄物來開…『敦煌變文集』はP2319(甲)およびBD00876(戊)にもとづき「和尚」を「世尊」に改め、『校注』もこの説を受ける(た

だし『校注』が指摘するように、BD00876(戊)はこの箇所を「和尚」に作る)。仮にこれらに従い、「世尊」の誤りと見て訳す。「寄」は一時的に預ける、預かるの意。

(四)問言…たずねて言う。「問」を二音節化する役割を「言」が担っているとするれば、「たずねる」となるか。P2319(甲)は「報言(答えて言う)」とする。このままでは直前の目連のセリフをみちびく「報言」と重複し、文脈に合わないように思われる。ただし本訳注[4]に「逢著目連遥報言(目連に出会ふと遠くから申します)」とあるように、「報」には応答、回答のニュアンスが薄い場合があるため、当該一文においても応答の意と取る必要は必ずしもないかもしれない。前出[4]注(三二)「遥報言」参照。BD00876(戊)は「聞言(言うのを聞いて)」とするが、字形の類似による「問言」の誤りであろう。

(五)是没…なに。疑問代詞「没」については前出[6]注(六)「和尚又没事由來」参照。P2319(甲)は「甚(なに)」一字に作る。唐・趙璘『因話錄』巻四「諧戲附」に「玄宗問黃幡綽、是勿兒得人憐(玄宗皇帝が黃幡綽にたずねた、いかなる子が可愛がられるのかと)」とあり、注に「是勿兒猶言何兒也(是勿兒)は「何兒」のことをいう」と見える。蔣禮鴻は同条を引くとともに、中古音「勿」は「没」と同じ発音に読むべきであり、「是没」はすなわち疑問詞「甚没」「什麼」であると述べる。

(六)十二環錫杖…十二の環がついた錫杖。錫杖は僧侶、修験者の持つ環のついた杖。もと、インドの僧が山野を遊行(遍歴)する時、振り鳴らして毒蛇や害虫を追ったものをいう。また門扉を叩くのにも用い

た。中国でも古くから用いられたが、のちに実用を離れ儀具にされた。頭部は錫製、塔婆形で数個の金属の環をつける。中部は木製あるいは鉄製の杖、下部は牙・角製。比丘十八物の一つ（『広説』）。十二の環は十二因縁（人間の苦しみ、悩みがいかんして成立するかということ）を考察し、その原因を追求して十二の項目の系列を立てたもの。生存の条件を示す十二のものの系列（『広説』）に通じる。東晋・訳者不明『得道梯橙錫杖經』に「十二環者、用念十二因縁（錫杖に付けられた）十二の環は、十二因縁を念ずるのに用いる」「錫杖四鈷應四諦、環應十二因縁（錫杖の四鈷は四諦（四種の真理。前出[2]注（二）「屈指先輪^{輪下}四諦法」参照）に応じ、環は十二因縁に應ずる）」とある。杏雨羽071は「錫」の右肩に「十二環」を小字で補う。

(七) 獄卒：杏雨羽071が「獄主」とする以外、三本とも「獄卒」に作る。文脈に鑑みて「獄主」と訳す。「獄卒」は以下すべて「獄主」の誤り（『校注』）。

(八) 貧道×阿孃：S2614(原)およびBD00876(戊)は「貧道阿孃（拙僧の母）」、P2319(甲)は「阿孃」二字に作り、杏雨羽071は「貧道覓阿孃来（拙僧は母を探しに参りました）」とする。

(九) 故：訳文では「特に、わざわざ」と解した。『法苑珠林』卷八五「六度篇 感應緣」「見女受苦、故来相救（女が責め苦を受けているのを見て、特に助けに参ります）。「ゝのため」の意と取ることも可能。(一〇) 迢：この字について項楚校は以下すべて「招（動かす）」に作るべきとする。「迢」は高いさま、またはるか遠くを表す語であるが、唐・

元稹「舞腰」詩（『元稹集編年箋注』元和五年）に舞踊の動作を描写

して「裙裾旋旋手迢迢、不趁音聲自趁嬌（スカートの裾はくるくると手はゆらゆらと、楽の調べに頼らずとも自ずから愛くるしさに満ちあふれている）」と言い、「迢迢」二字でゆらゆらと揺れるさまが表される。「迢」にこうしたニュアンスが含まれているとすれば、必ずしも「招」に改める必要はないように思われる。杏雨羽071は「手把（手にてを取り）」とする。

(一一) 白幡(幡)：白い幡。幡は「翻（ひるがえる）」および「幡（旗、のぼり）」の異体字。俗書においては巾偏と立心偏との間にしばしば混同が見られることから、訳文では後者の意に解した。P2319(甲)は「幡」に作る。「幡」はサンスクリット語 *paṭākā*（音写「波多迦」）の訳語で、仏・菩薩の威徳を表す莊嚴具を指すこともあるが（『広説』）、「伍子胥變文」(S228)に「昭王怕懼之心、遂即白幡降伏（昭王は恐れを抱き、すぐさま白旗を掲げて降伏しました）」とあるように、通常の旗も指す。ここでは後者の意に解した。

(一二) 杙(打)：木偏の字形「杙」には撞く、叩くという意味があり、敦煌文書では「太子成道經」(S396)「便杙喜鼓、便与成親（お祝いの太鼓を叩き、婚姻を結びました）」、「韓朋賦」(S4901)「使者下車打門（使者は車を降りて門を叩きます）」などの用例がある。ただし目連變文にもしばしば認められるように、俗書においては手偏と木偏の通用は珍しくなく、ここに挙げた両例も「打（打つ）」への置きかえが可能である。P2319(甲)および杏雨羽071に照らし、「打」字と理解するのが妥当かと思われる。

(一三) 鐵鼓(鼓)：李白の「軍行」詩に「城頭鐵鼓聲猶震、匣裏金刀血

未乾（城壁の鉄鼓の音はなおもとどろき、箱の中の金刀についた血は今も乾いていない）（『李太白全集』「中華書局一九七七年」巻四）とあるように、戦時に用いる太鼓をいう。実際に鉄製であるとすれば銅鑼を指すか。「鼓」の字形はS2614(原)・P2319(甲)およびBD00876(戊)は「鼓」、杏雨羽071は「鼓」に作る。

(一四)弟(第)：「弟」は「第」と音通字。前出[5]注(三)「弟」参照。

(一五)隔：唐・菩提流志訳『一字佛頂輪王經』巻四に「擘四面隔爲十二隔。佛右北隔畫電煩惱王菩薩（四方を十二の区画に分け、仏の右側の北壁に電煩惱王菩薩を描いた）」とあるように、隔てること、隔てられた区画、またその隔壁を指す。『増一阿含經』巻三四に「鐵圍中間有八大地獄、一一地獄有十六隔子（鉄の囲いの中に八大地獄があり、一つ一つの地獄に一六の区画がある）」とあるように、地獄は十六（または十八）の「隔子（区画）」に分かれていると考えられていた。

(一六)已否：「已否」は敦煌変文で頻用される疑問語氣詞で、以否・已不・以不に同じ。前出[5]注(四)「好在已否」参照。

(一七)已否^タ過無：S2614(原)の二字「已否」は衍字か。「タ」は「亦」の異体字。前出[6]注(一六)「大王繪^タ得知否」参照。S2614(原)が「過無」とするのは二字が転倒したものである。仮に杏雨羽071・BD00876(戊)に従って訳す。P2319(甲)は第二の区画以下、経過を省略し、「過到第二隔中、直至第三、第四、第五、第六隔中、亦无（第二の区画にやって参りますと、直ちに第三、第四、第五、第六の区画へと至りましたが、やはりありません）」とする。

(一八)弟^二■隔中：S2614(原)は「弟(第)」の直後に一字を消し、

右肩に小字で「二」を書き入れるが、前後の文脈から見て「三」の誤りであろう。訳文では「第三の区画」とした。BD00876(戊)は「弟隔中」とする。杏雨羽071はこの後の経過を省略し、「過到第三隔中、有青栴夫人已否。亦無。過到第四隔、第五隔、第六隔中、並無（第三の区画にやって参りましたが、青提夫人はおりますでしょうか。またしてもありません。第四の区画、第五の区画、第六の区画の中にやって参りましても、まったくありません）」とする。

(一九)遼^ト黃^ト幡^ト打^ト鐵^ト鼓^ト：BD00876(戊)に見えるこの六字は上から縦線で消され、右側に誤字を表す「ト」が書き加えられている。前後に類似するパターンが繰り返されるため、直前の一文が誤写されたものであろう。

《散文》

S2614(原) … 獄卒行至第七隔中、遼碧幡打鐵鼓。第七隔中有青提
P2319(甲) … 獄卒行至第七隔中、××××××××××××××××
杏雨羽071 … ××過到第七隔×、遼黑幡打^鼓鼓。第七隔中有青提
BD00876(戊) … 獄卒行至第七隔中、遼碧幡打鐵鼓。第七隔中有一青提

夫人已否。其時×青提×××第七隔中、身上下冊九道長釘、晷在鐵床
×××××××見青提夫人×××××××身上下冊九道長打、×在×床
夫人已否。其時×青提夫人在第七隔中、身上下冊九道長釘、晷在鐵床
夫人已否。其時×青提夫人在第七隔中、身上下冊九道長釘、晷在鐵×

之上、不敢應獄主。××××××××
更問、「弟七隔中有青提夫

之上、不應該獄と主と。〔拏〕迢黑懾打鐵鼓。××「第七隔中有青梃夫

人已否。」「若看覓青提夫人者、罪身即是××××××××^(二四)」早箇

人已否。」〔若×覓青^人樵夫人者、罪身即是×獄と主と。〕報言、「早箇×已否。」「若×覓青提夫人者、罪身即是××××××××××」早箇

緣甚×不應×。」「^(二六)「**恐畏獄主**更將別處受苦、

「緣何事不應我。」

罪人身上早有卅九道長釘。

（二五）

「恐畏獄主更將別處受苦。」

緣甚×不應×。」××××××××××「恐懼獄主更將別處受苦

所以不敢應獄×主×。」報言、「××門外有一三寶、剃除鬚髮、身披

×××××獄×主×
報言、「××
門外有一三寶、×××××
×××

所以不敢應獄×主×。」報言、「××門外有一三寶、剃除鬚髮、身被

法服、稱兇言是^兇、故來訪看××××××××青提夫人聞語、良

法服、稱×道是兒、故來 訪覓阿孃、名青提夫人。」××××聞語、良

法服、稱×言是兇、故来■ト訪覓×××××××」青提夫人聞語、良

久思惟、報言、「獄主、我無兒子出家、不是莫錯。」獄主聞語、却迴行

××× 報言、「獄主、×無兒×出家、××莫錯。」獄主聞言、却迴×

久思惟、報言、「獄主、我無兒子出家、不是莫錯。」獄主聞語、却迴行

至高樓、報言、「和尚、緣有何事、詐認獄中罪人××是阿孃、緣事沒

至高樓、報言、「和尚、緣×何×錯認獄中罪人言道是阿孃、×如何

至高樓、報言、「和尚、^{ママ} 濠有何事、^{ママ} 詐認獄中罪人××是阿孃、^{ママ} 濠沒事

「^(三三) 謗語」目連聞語、悲泣雨淚。啓言、「獄主、^(三四) 貧道解^(三五) 來傳語錯。頻道

「目連聞語、悲泣××啓×、「獄主、××××××××某乙」(三六)

謗語。」目連聞語、悲泣雨淚。啓言、「獄主、貧道解來傳語錯。頻道

小×名是羅卜。父母亡××後、投仏出家、×××××号×大目軋連。

小時名字羅卜。父母亡沒已後、投仏出家、剃除鬚髮、号曰大目軋連。

獄主莫嘆、更問一週去。」獄主聞語、却週至第七隔中、報言、「罪人、

諸獄主莫嘆、更問一週去。」獄主×聞語、却週至××××××「罪人、

×獄主莫嘆、更問一週去。」獄主^(三九)文聞語、却週至第七隔中、報言、「罪人、

門外三寶小時×自羅卜。父母終沒已後、投仏出家、剃除鬚髮、号^ト曰

門外三寶小時×字羅卜。×××××××××××××××××

門外三寶小時名字羅卜。父母終沒已後、投仏出家、剃除鬚髮、号^ト曰

大目軋連。」青提夫人聞語×、「^ル門外三寶、若×小時字羅卜、×是×也。

××××× 青提×××××曰、「××××× 若是小×名羅卜、即是兒也。

大目軋連。」青提夫人聞語×、「門外三寶、若×小時字羅卜、×是×也。

罪身一寸腸嬌子。」獄主^(四)聞語、扶起青提夫人、^(四三)升壇却冊九道長釘、

罪身一寸腸嬌子。」獄主聞語、扶起青提××、×拔却冊九道長釘、

罪身一寸腸嬌子。」獄主聞語、扶起青提^(四)夫人、^(四三)升壇却冊九道長釘、

鐵鎖×^(四四)膏、^(四五)生杖圍遶、^(四六)駢出門外、母子相見處。

鐵鎖×^(四四)膏、^(四五)生杖圍遶、^(四六)駢出門外、母子相見處。

鐵鎖×^(四四)膏、^(四五)生杖圍遶、^(四六)駢出門外、母子相見處。

【現代語訳】

獄卒は第七の区画の中にたどり着くと、緑の幡をひらめかせ鉄鼓を叩きました。第七の区画の中に青提夫人はおりますでしょうか。その時青提夫人は第七の区画の中におりましたが、身体は四十九本の長い釘に貫かれ、鉄の寝台の上に打ち付けられておりましたので、獄主に答えかねておりました。獄主はさらに尋ねます、「第七の区画の中に青提夫人はおるか。」「もし青提夫人を探しておられるのであれば、わたくしこそそうでございます。」「なぜ早くに返事をしないのか。」「獄主様がさらに（私を）別の場所に来てゆき、苦しい目に遭わされることを恐れたために、獄主様にお答えいたしかねておりました。」獄主は答えて申します、「門外におられる一人の僧で、剃髪して、身には法衣をまとい、息子と名乗る方が、わざわざ尋ねて参られた。」青提夫人はその言葉を聞いて、長い間考えこむと、お答えいたします、「獄主様、私には出家の息子はおりませんし、おそらく間違ひではありませんまいか。」獄主はその言葉を聞くと、高樓へと戻り、答えて申します、「御坊、なにごとあつて、獄中の罪人が母親だなどとたばかられたのか、なにゆえに偽りを申されたのか。」目連はその言葉を聞いて、悲しみ雨のように涙を流します。口を開いて申しますには、「獄主様、拙僧が考えてみましたところ言葉をお伝えするのに間違ひがあつたようです。拙僧は幼いころは羅卜と申しておりました。父母を亡くした後、仏の所へ身を投じて出家し、剃髪して、号を大目軋連と申します。獄主様どうぞお怒りにならず、もう一度尋ねに行ってください。」獄主はその言葉を聞いて、第七の区画の中に戻って参りますと、答えて

申します、「罪人よ、門外の僧は幼いころ羅卜という名であった。父母を亡くした後、仏の所へ身を投じて主家し、剃髪して、大目乾連と号しておられる。」青提夫人はその言葉を聞き、「門外の僧が、もし幼いころ羅卜という名であったならば、そうでございます。私が心にかけたかわい子でございます。」獄主がその言葉を聞いて、青提夫人を助け起こし、四十九本の長い釘を抜いておしまいになると、鉄の鎖が腰を繋ぎ、杖がぐるりと取り囲み、門外へと追い立てて、母子がまみえるところでございます。

【注】

(一〇)身上下冊九道長釘、梟在鐵床之上…身体は四十九本の長い釘に貫かれ、鉄の寝台の上に打ち付けられている。『和菩薩戒文』に「連明曉夜下長釘眼耳之中皆泣（朝まで夜通し長い釘を目や耳に打たれ皆泣いております）」とあるように、長釘は地獄での拷問描写にしばしば登場する。「道」は細長いものを数える量詞。本。杜甫「佐還山後寄三首」其三「幾道泉澆圃、交橫落幔坡（いく筋もの滝が田畑に流れ込み、なだらかな斜面を縦横に流れ落ちてゆく）」（『杜詩詳注』〔中華書局一九七九年〕卷八）。S2614（原）とBD00876（戊）の「梟」、杏雨羽071の「梟」は共に「鼎」の異体字。「鼎」には折しも、まさしくといった意もあるが、ここでは動詞「櫛（打つ）」「杙（の異体字）」と解釈した。「鐵床」は地獄での拷問に使用される鉄の寝台。前出⑫注（三五）「銅柱鐵床地獄」参照。P2319（甲）は「長釘」を「長打」に作る。黄征「敦煌俗字典」に「打」は「釘」の俗字という。この説に従えば、P2319

（甲）は「身上下冊九道長釘、釘在床上（身体は四十九本の長い釘に貫かれ、寝台上に釘付けにされておりました）」となる。

(二)獄主×主×…前後を含めて整理すると、「不敢應獄主。獄主更問（獄主さまにお答えいたしかねておりました。獄主はさらに尋ねます）」となり、「獄主」は青提夫人のセリフ内で「應（答える）」の目的語として、またそれに続く地の文の主語として機能する。前文の目的語が後続する文の主語を兼ねる例は白話文にしばしば認められ、本セクションには「獄主」二字に踊り字を付加してこの用法に相当させるパターンが特に集中して見える。杏雨羽071は「獄主」と表記するが、これも他本と同様「獄主」を二回繰り返すことを意味する。

(三)更問…さらに尋ねる。P2319（甲）は「喚云（呼ばわつていうには）。杏雨羽071には「更問」に相当する句が存在せず、後に続く「第七隔中……已否」が地の文かセリフかやや判別しがたい（「第七隔中」は行間への書き入れ）。当該部分の直後に青提夫人からの応答が続くため、セリフと見てかきかっこを付した。なお、杏雨羽071にのみ、この前に「牽遛黑幡打鐵鼓（黒い幡を抜き取ってひらめかせ、鉄鼓を叩く）」という七字が見える。一字目の下部は「手」、上部はやや判読しがたいがうかんむりかと思われる。仮に「牽（抜き取る）」と翻字する。

(三三)罪身即是…杏雨羽071ではこの直後に「獄主報言」四字が見える。「獄主」二字に踊り字を付加する例については前掲注（二一）「獄主×主×」参照。青提夫人のセリフの末尾が獄主への呼びかけとなるのはやや不自然な印象を与える。踊り字は誤って書き加えられたものかも

しれない。この点に関しては後掲注(三二)「不是莫錯獄主聞語」も併せて参照されたい。いずれにせよ、杏雨羽^〇ではこの四字があることで後に続く発話の主体が明確になっている。一方他本では、青提夫人と獄主のセリフが直接連続する。セリフの応酬には緊迫感を高める効果が期待され、獄主の詰問が短く簡潔であることも効果の一翼を担うものであろう。

(二四)早箇…「早(早く)」に同じ。「箇」は特定の意味を有さない。本訳注^⑥にも「雖然不識和尚、早箇知其名字(和尚様と面識はなくとも、と)からお名は存じておりました」との例がすでに見える。

(二五)罪人身上早有卅九道長釘圍…杏雨羽^〇にのみ行間への書き入れの形で見える。「罪人はとうから身体を四十九本の長い釘に貫かれて打ち付けられておりました」。

(二六)恐恐畏…恐れる。求那跋陀羅訳『雜阿含經』卷二三「我不恐畏死、志願求解脫(私は死をも恐れず、解脫することを願っております)」。

(二七)罪人…杏雨羽^〇にのみ見える。地獄の罪人である青提夫人への呼びかけ。

(二八)三寶…僧。「三宝」は一般的に仏・法・僧の三つを宝にたとえる語として使用されるが、「太子成道經」(S2352V)に「太子聞説、非常喜悅、急便下馬、頂礼三寶(太子は「僧の」その言葉を聞いて大変お喜びになり、急ぎ馬から降りると三宝に頂礼いたします)」とあるように、僧を指す用法も見られる。

(二九)剃除鬚髮(鬚髮)、身披法服…剃髮染衣、すなわち出家して僧と

なること。法服は僧尼の着用する衣服。法衣。「刹利衆中或時有人自厭己法、剃除鬚髮而披法服。於是始有沙門名生(王族の中である時ある方が己法に嫌気が差し、剃髮して法衣をまとった。こうして沙門という名前が始まった)」「(長阿含經)卷六、「起正信心向佛出家、剃除鬚髮被於法服、而爲苾芻(信心を起こして仏のところで出家し、剃髮して法衣をまとい、苾芻(比丘。修行僧)となった)」「(佛說帝釋所問經)などというようにほぼ定型表現化しており、本訳注^③にも「剃除須(鬚)髮了」という一句がすでに見える。「鬚」は口ひげ、杏雨羽^〇の「須(鬚)」はほおひげをそれぞれ指すが、仏典には「剃除鬚髮」、「剃除鬚髮」のいずれの言い回しも認めることができる。P2319(甲)にはこの二句が見えない。

(三〇)故来……聞語…杏雨羽^〇では「故来訪覓阿嬢、名青提夫人、聞語(特に母を訪ねて参られた、「母の」名は青提夫人という。」「(青提夫人は)その言葉を聞いて)」とし、「阿嬢」「青提夫人」に目的語と主語をそれぞれ兼ねさせる。こうした語法については本セクション注(二一)「獄×主×」参照。

(三一)不是莫錯獄主聞語…「莫」は「ゝのはずだ」の意。「廬山遠公話」(S2073)「見大石一所、共(其)下莫有水也(大きな石のところを見れば、その下にはきつと水があるはずです)」「獄主」二字にはBD00876(戊)にのみ踊り字が見える。これに従い「……おそらく間違いはありませんまいか、獄主様。」獄主はその言葉を聞くと」と訳すこともできるがやや不自然である。注(二一)「獄×主×」でも触れたように、本セクションには「獄主」に踊り字を付加するパターンが複数例見え

るため、BD00876(戊)では誤ってこれが繰り返されたものであろう。

(三二)縁事没(縁没事)…なにゆえ。「没」は[6]注(六)「和尚又没事由來」および本セクション注(五)「是没」に既出の疑問代詞の用法。「燕子賦」(P249)「不曾觸犯豹尾、緣沒橫羅」(罹)鳥災(豹の尾に触れたこともないというのに、なにゆえ身に覚えのない災いを被るのか)など。

(三三)諷語…言葉をいつわる。「諷(いつわる)」の異体字。

(三四)解困…「解」は解釈する、説明するの意。前者と取れば「考えてみると」、後者と取れば「説明すると」となるか。訳文では前者の意に解した。項楚校は「適來(今しがた)」に作るべきとするが、原文のままでも意味が通るため、必ずしも改める必要はないものと思われる。

(三五)傳語錯…言葉を伝えるのに誤りがある。伝言の内容がうまく伝わらず、誤解を受けたことを言う。

(三六)某乙…一人称「わたし」。「太子成道經」(S480V)「某乙在世、不生決定之心、无〔無〕其信受(私が俗世におりましたときには、教えを固く信じる心を持たず、教えを信奉することもしませんでした)」。

(三七)小時×自羅卜:P2319(甲)は「小名是羅卜(幼名は羅卜)」、BD00876(戊)は「小時名字羅卜(幼いころの名は羅卜)」とし、各本とも異なる。S2614(原)「自羅卜」の表記は、直後の獄主のセリフでも繰り返される。『校注』には、「自」は発音の近似による「字」の誤りかと言う。唐・李紳「鶯鶯歌」(『全唐詩』卷四八三)に「緑窓嬌女字鶯鶯、金雀姬鬢年十七(緑窓の可愛い少女、名は鶯鶯、かんざしを

髪に飾る十七の年頃)」とあるように、「字」には「名を」というの意がある。『校注』の説に従い「字」に改めるならば、「名を羅卜という」の意となる。「自」を「」のほうでは「の意と解すならば」「羅卜」は動詞的に機能し、全体の意味を「幼いころはといえば羅卜であった」と取ることも可能。仮にこちらで訳す。

(三八)獄主:S2614(原)では「卒」字の上に「主」字が重ね書きされているように見える。

(三九)文聞…「文」の字は上から線によって消されている。「聞」と音通であることによる誤記。

(四〇)却迴至第七隔中、報言:P2319(甲)はこの部分を「却迴至(戻って)」とする。

(四一)一寸腸…「腸」は「腸」に同じ。『唐五代語言詞典』に実子のことと言い、当該箇所を引用する。捉えられた小猿を追って息絶えた母猿の腹を裂くとはらわたが断ち切れていたという、有名な「断腸」の故事(『世説新語』「黜免」)とも類似する表現であるが、この三字で子供を意味する例は管見の限り認めることができない。元稹「感逝」詩(『元稹集編年箋注』大和三年)に「三聲啼婦臥床上、一寸斷腸埋土中(女は三たび声を上げて寝台に倒れ、はらわたが千々に裂かれるほどの悲しみは土の中に埋められた)」とあり、ここでは死んでしまった子供が「一寸斷腸」にたとえられている。「一寸腸」には「心」の意味があり、劉禹錫「夢揚州樂妓和詩」(『全唐詩』卷八六八)に「夜深曲曲灣灣月、萬里隨君一寸腸(夜は更けて空には三日月がかかり、心は万里のかなたまであなたに付き従ってゆく)」などの例がある。

(四一)夫人：P2319(甲)にはこの二字がなく、BD00876(戊)では文字の上から塗りつぶされているように見える。

(四二)升𢀛却：二字判読困難。S2614(原)の一字目は「升」「斗」「叔」の字形の一種に似るが、「拔(抜く)」字が誤って伝えられた可能性も疑われる。二字目は「𢀛」もしくは「𢀛」という字形に見えるが、この二字では意味をとりがたい。BD00876(戊)もほぼ同様の字形に作る。『校注』はP2319(甲)に従って「拔却(抜いてしまう)」とする。本訳もこの解釈に従った。

(四三)鐵鑠×膏(腰)：「鑠」は「鎖(鎖、拘束する)」の異体字、「膏(S2614(原)→P2319(甲))の字形は正確には「要」の下に「肉」」は「腰」の異体字。『法苑珠林』巻八五「六度篇 感應緣」「僧正食時、夫人自來看、枷項鎖腰、獄卒衛從(僧が食事をしているとき、夫人がやってきたのを見れば、枷が首を固定し鎖が腰を縛り、獄卒が周りを固めています)」。

(四五)生杖・捕縛、拘束用の刑具。杖と訳した。「降魔變文」(『敦煌變文集』巻四)「生擒須達、並祇陀太子、生杖圍身(須達(波斯匿王の大臣で仏陀に帰依した長者スダッタ)ならびに祇陀太子(波斯匿王の太子ジェータ)を生け捕りにし、杖でその身を取り囲んだ)」、「漢將王陵變」(P3627)「漢將王陵來斫營、發使交人捉他母。遂將生杖引將來、搭箭彎弓如〔而〕大怒(漢將王陵が急襲してくると、〔項羽は〕人をやって彼の母を捕らえさせた。杖にて召し連れると、矢を取り弓を引いて大いに怒る)」など変文にしばしば認められる語。『選注』はいずれの用例も「繩杖」に改めるべきとし、その理由として、捕縛の

際に繩と杖が使用されたこと(『搜神後記』巻六「忽逢四人、各執繩及杖來赴述(出くわした四人は、おのおの繩と杖を手に〔馮〕述へと向かってきた)」、また「繩棒」という語があること(『五燈會元』巻一五「侍者將繩棒來(供の者よ、繩棒を持って参れ)」などを挙げる。ただし管見の限りでは他に「繩棒」の例を見出すことができず、熟語として定着しているとは言い難いように思う。この語の場合むしろ、「生」字は二音節化のために付加されたものと理解すべきか。「生」には強調の用法があり、例えば唐・張鷟『朝野僉載』巻三に「天后中、成王千里將一虎子來宮中養、損一宮人、遂令生餓數日而死(天后(高宗の治世に定められた皇后武則天の称号)の時代、成王千里(李千里。本名は仁)が一頭の虎を宮中に連れてきて飼っていたが、一人の宮人を殺したため、命じてひどく飢えさせると数日して死んだ)」とあるように、「生きながらにして」「むごくも」「残酷にも」などのニュアンスがしばしば含まれる。捕縛や拘束に関連する語である「生杖」にもまた、そうした色合いを見出すことが可能であるように思われる。

(四六)駟出・追放する。『雜阿含經』巻二〇「婆羅門中、有偷盜者、或鞭或縛或驅出國(婆羅門の中に、盗みをはたらく者があれば、鞭打ちまたは拘束もしくは国外追放とする)」。(藤田)

[19]

《唱》

S2614(原)：生杖魚鱗似雲集、千年之罪未可知、七孔之中流

「桓公十二年」に「宋成未可知也、故又會于虚（宋の誠意を知ることができなかったため、再び虚で会うこととなる）」と類似する用例が見られる。

〔四〕七孔…人の顔にある鼻・目・口・耳の七つの穴。東晉の張湛が注した『列子』巻四「仲尼第四」に「乃不知是我七孔四支之所覺、心腹六藏之所知、其自知而已矣（とはいっても、それが私の七竅四肢〔外的な感覚器官。顔にある七つの穴と四本の手足〕を通して知覚するのか、それとも五臓六腑〔精神の宿る所、元気の生ずる所。心臓・肺臓・肝臓・脾臓・腎臓の五臓に、腎臓の右の方を命門として加えている〕を通して知覚するのかは、一向にわからないまま、ひとりでに知るだけです）」とある。

〔五〕蒺（蒺）離×歩×從空入…「蒺（蒺）離」はマキビシのこと。前出〔注〕〔五〕「蒺離入腹如刀臂」参照。BD00836（戊）は「蒺離從歩×從空入」となるが、三文字目の「從」は上から消された痕跡が見える。直後の「從」による誤写か。S2614（原）の「歩」の後には踊り字がなく、文意は通るが六言になるため、抄写する際の脱落かと推測される。P2319（甲）は該句を含めて以下四句を欠く。

〔六〕由如五百乘破車聲…「由」は「猶」の通用字。前出〔注〕（二五）「由如大火出蓮花」参照。「乘」は量詞。馬四頭立ての戦車一台を一乗という。「破車」は仏教関連用語、壊れた車。「破車聲」はここでは空から降ってきたまきびしの音と取ったが、まきびしに打たれた母の悲鳴や、打たれて骨がギシギシとする音とも考えられる。「譬喩經變文」(BD08333)「繞生餓鬼道、受罪何時了。行似破車聲、卧如枯樹倒（回

り回って餓鬼道に転生し、苦しい目に遭うのはいつまでだろう。歩く時は破れた車が走っているようにゴロゴロと声を立ち、横たわる時は枯れた木が倒れるようにボロボロと崩れる）」、「目連緣起」(P2193)「慈母聞喚數聲、撞身強々起来、状似破車無異（慈母は〔目連の〕呼び声を聴いて、ぶつかりながら無理矢理身を起こし、その様子はまるで壊れた車のようだ）」などの例がある。

〔七〕𦵑脊豈能…「𦵑」は腰の異体字。前出〔注〕（四四）「鐵鎖×𦵑（腰）」参照。「豈」は「豈」の異体字、「豈能」は「怎能、哪能（どうして〜ができよう、とてもできない）」。

〔八〕𦵑管拾…「𦵑」について『校注』では、抄本において「相」の草書体は「𦵑」と字形が近似するため間違えやすく、ここの「𦵑」も「相」であるべきと解釈している。「管拾」は『選注』では「俟考、疑指關節轉動（不明、恐らく関節が動くの意であると疑われる）」と説明するが、前後の文脈を鑑みると、該句は空から降ってきたまきびしの激しい攻撃を受けた母の腰や背骨が置かれている状況を描写するものと推察される。従って、腰が「轉動（動く）」ではなく、腰をしっかり保つことができないと解釈すべきであろう。この語は他にあまり用例がなく、音が近似する語彙としては「管束（拘束する、締め付ける）」が挙げられ、『黄檗斷際禪師宛陵錄』に「障汝心故。被因果管束、去住無自由分（業障は汝の心によるものである。因果応報に拘束されれば、行くことも留まることも自由にすることができない）」とある。ただ、「管（かまう、配慮する）」と「拾（慎む、おとなしくする）」の二文字の意味から考えれば、「管拾」のままでも「管束」と同

様の意味になりうると考えられる。

(九)牛頭杷鏤東西立…「牛頭」は「牛頭馬頭」の省略か。前句「獄卒攀又左右遮」の「獄卒」と照応させるために二字句を用いたのである。 「杷」は「把(片手で握る、持つ)」と通字。前出[註(一〇)]「杷」参照。 P.2319(甲)とBD00876(戊)は「把」に作る。

(一〇)目連抱母踊泣泣：BD00876(戊)は七字目を「哭」に作り、これを上から消して、右行間に「泣」と修正して書き込んでいる。下文の「哭曰…」につられて誤写したか。

《唱》

S.2614(原) … 哭曰、「由如不孝順、殃及慈母落三塗。積善之家
P.2319(甲) … 哭曰、「由如不孝順、云々××××× ××××
BD00876(戊)：哭曰、「由如不孝順、殃及慈母落三塗。積善之家

有慶餘、皇天只沒煞無辜。阿孃昔日勝潘安、如今焦稚頓摧戮。
××× ×××××××× ×××××××× ××××××××
有餘慶、皇天只沒煞無辜。阿孃昔日勝潘安、如今焦稚頓摧戮。

曾聞地獄多辛苦、今日方知行路難。一從遭禍耽娘死、每日墳陵常
×××××××× ×××××××× ×××××××× ××××××××
曾×地獄多辛苦、今日方知行路難。一從遭禍耽娘死、每日墳陵常

祭祀。孃と得食喫已否、「過容顏惣顛顛。」

×× ×××××××× ××××××××

祭祀。孃と得食喫已否、一過容顏惣顛顛。

【現代語訳】

泣きながら言うことには、「私の親不孝のせいで、慈母に災いを及ぼして地獄に墮とされてしまいました。善行を積む家には余慶があるといいますが、お天道様はなぜこのように罪のない人を滅ぼそうとするのですか。母は以前潘岳よりも美しかったのに、今は簪れてじきに壊れてしまいそうです。以前から地獄は辛いところであると聞きますが、今日はやっと思う道苦しさを知りました。父母が亡くなられてから、私は毎日お墓の前でお祀りをしていましたが、母上は食べ物を召し上がることができたでしょうか、容貌がこんなにも憔悴してしまわれるなんて。」

【注】

(一)「由如不孝順」…最初の二字は三本とも「由如まるで」のようだと作る。このまま訳せば、該句の意味は「まるで私の親不孝のせいで、母に災いを及ぼし、三途に墮とされてしまったようだ」となり、実は私のせいではないというニュアンスが含まれるため、内容にそぐわないように思われる。項楚校は後出の一文「目連啓言、慈母、由兒不孝順、殃及慈母、墮落三塗」をもとに、「如」は「兒」に通じると解釈し、「校注」はさらに、写本の中では「如」と「兒」はしばしば通用するとの説明を加えている。確かに「兒」の方が文脈が通るため、ここでも「由兒」を以て訳す。P.2319(甲)はいの句の後に小字「云々」を置き、以下「目

連見母却入獄中」までの韻文を全て省略し、かわりに「其母却駟入獄（その母は追ひ立てて獄中に入らせました）」の一言が加えられている。

⑮に前出の「駟出門外」に対応するためか。

（二）殃及慈母落三塗…「殃及」は「殃い^{わざわ}がおよぶ」の意。前出②注

（一七）「殃及」を参照。七字目の「塗」は、「墜」という誤字を上から修正したように見える。「三塗（三途）」は前出①注（四）「三塗業消」参照。

（三）積善之家有餘慶…「善」は「善」の異体字。『周易・坤』「象曰…積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃（象伝）善行を積む家には、必ず余慶があり、不善を積む家には、必ず余殃があると」に由来する。

（四）只没…蔣禮鴻は「這麼、如此（こんなにも、このように）」と解釈し、音通により「只磨」などとも書くという。『歷代法寶記一卷』（S.16）に「唐和上便問、汝於天谷山作何事業。吾答一物不作只没忙。唐和上報吾、汝忙吾亦忙矣（唐和尚が訊ねます。「あなたは天谷山で何をなさっていますか。」私は「何もしていないのに、こんなに忙しいです」と答えます。唐和尚はさらに私に言います。「あなたが忙しいなら、私も忙しいです）」とある。

（十五）阿嬢昔日×勝潘安：BD00876（戊）は「阿嬢昔日勝勝潘安」とあるが、五字目の「勝」は上から消されている。「潘安」は潘岳（二四七―三〇〇）のこと。字は安仁であるゆえ「潘安」と略して称される。西晋時代を代表する文人の一人、河南中牟（現河南省鄭州市）の人、類稀な美貌の持ち主として知られる。『世説新語』卷下之上「容止第十四」に「潘岳妙有姿容好神情。少時挾彈出洛陽道、婦人遇者莫不連

手共縈之。左太冲絶醜。亦復效岳遊邀、於是羣嫗齊共亂唾之、委頓而返（潘岳はスタイルがよく美しくて顔つきがハンサムだった。若い頃はじき弓を脇に挟んで洛陽の道に出ると、出会った女性はみな手を繋いで彼を取り込んだ。左太冲「左思」は非常に醜い男であった。それでも潘岳の真似をして外をぶらつく、老婆らに一斉に唾をかけられ、しょんぼりと帰っていった）」という。

（一六）如今焦稚頓摧滅…四文字目の「稚」、BD00876（戊）は「頓」と作り、表記が安定していないものと思われる。「焦稚」は憔悴（やせて、衰弱すること。憂い苦しんでやつれること）「広説」と同じ。「摧滅」については『校注』の引用する徐震堦校に従い、「摧滅」を摧殘（破壊されている。くだけ、こなわれている）「広説」と解釈する。『選注』でも同様の解釈がなされている。

（一七）曾聞地獄多辛苦：BD00876（戊）は「曾×地獄多辛苦」とあり、抄写の際、二文字目の「聞」を脱落したか。

（一八）今日方知行路難…「行路難」は樂府雜曲辭辭の名。世路の艱難と離別悲傷の意を述べたもので、南朝宋・鮑照の「擬行路難」詩十九首と李白の「行路難」詩三首は最も有名である。該句と同一の文句は賈賓王の「從軍中行路難」二首詩「昔時聞道從軍樂、今日方知行路難（昔は從軍するのが楽しいと聞いていたが、今日はやっと思行く道の大変さを知った）」に見られる。

（一九）一從：「自從（～より、～から）」と同じ。「王昭君變文」（P.2553）「二從歸漢別連（連）は「漢」の誤りか）北、萬里長懷霸岸西（漢と別れて匈奴に嫁いだから、万里を離れていても胸の中には常に霸陵岸

の西側〔長安〕を思う〕、「捉季布傳文」(P2368)「一從罵殘高皇陣、潜山伏草更難辛(漢高祖の陣を罵倒して破つてから、山に潜み草に伏し、さらに苦しくなった)」など、変文によく見られる。

(二〇) 𪛗𪛗死：「𪛗」は「耶」の異体字、「爺」に通じる(前出[4]注(五)「阿耶名輔相」)。「耶嬢」は父と母のこと。

(二一) 一過：過度に、甚だ。「曲子詞抄」(S2367)に「東西南北幾時分、一過交人腸欲斷(東西南北はいつ分かれるのか、甚だ人を悲しませる)」、「雙恩記」(Φ096)に「一過啼多血滿腮、肝腸寸斷幾千迴(鳴きすぎてはおが血まみれになり、はらわたは何千回もちぎれる)」と類似する用例が見られる。また、白居易の「追歡偶作」詩に「樂天一過難知分、猶自咨嗟兩鬢絲(樂天は甚だ身の程知らずで、いまだに兩鬢の白髪を嘆く)」とある。『大漢和辞典』では「一過」を「一生涯」としているが誤りか。

《唱》

S.2614(原)：阿嬢既得目連言、嗚呼怕擲淚交連。^(二二)「昨𪛗我兒生

P.2319(甲)：××××××××××××××××××××××××

BD00876(戊)：阿嬢既得目連言、嗚呼怕擲淚交連。「昨𪛗我兒生

死隔、誰知今日重團圓。^(二四)阿嬢生時不修福、十惡之徳皆具足。^(二五)當時

××××××××××××××××××××××××××××××××××××
死隔、誰知今日重團圓。阿嬢生時不修福、十惡之徳皆俱足。當時

不用我兒言、受此阿鼻大地獄。阿嬢昔日極芬榮、出入羅^(二六)悖錦障

××××××××××××××××××××××××××××××××××××
不用我兒言、受此阿鼻大地獄。阿嬢昔日極芬榮、出入羅^(二六)悖錦障

行。^(二六)那勘受此泥梨苦、變作千年餓鬼行。

××××××××××××××××××××××××××××××××××××

行。那勘受此泥梨苦、變作千年餓鬼行。

【現代語訳】

母は目連の話を聞いて、大声で泣きながら目連を撫でて申すよう。「以前わが息子と死別して、思いがけず今日は再会を果たしました。母は生きている間に善い行いをしなかった上、十惡の罪を全て犯しました。あの時わが息子の言葉を聞かなかったせいで、(今は)この阿鼻地獄の苦しみを受けています。母は昔若くてきれいで、薄絹の帳を出入りする時も錦の垂れ物で目隠しをしていました。たまらぬことにこの地獄の苦難を受けて、千年間餓鬼の振る舞いをするようになりました。」

【注】

(二二) 怕擲：他にあまり用例はない。項楚校は「伍子胥變文」(S328)に「子胥控馬籠鞭、就水抱得小兒、拍擲悲啼吊問(伍子胥が鞭を振るって馬を御して、水に近寄ると、子供を抱き上げ、軽く叩いて、悲しい声を上げながらお悔やみをいう)」とあることから、この「怕」も「拍」

□□ □□□□□□□□ 嬢と抄寫一行經。」

【現代語訳】

口の中から千回も舌が抜かれ、胸は百遍も鉄の犁で耕されました。骨の関節も筋も皮も至る所で切れ、刀や剣を煩わせなくても（身体は）自らボロボロとなつていきます。たちまちのうちに千回も死にますが、その都度声を掛けられると生きかえつてしまいます。この地獄に入れば同じ苦しみを受け、身分の貴賤も官位の高低も一概に裁かれます。あなたは家の中で頻繁に弔いをして、ただ郷里の人々から親孝行の名をもらうだけ、たとえお墓に向かつてお酒を注いでも、一行のお経を写すには及びません。」

【注】

〔一八〕口裏千廻抜出舌：BD00876〔戊〕は「口裏千扶廻出舌」と作る。

「扶」は「拔」の異体字、「扶廻」は「廻扶」の誤りか。

〔二九〕兇前：「兇」は前出[3]注（一）「兇」を参照。該字はセクション[7]にも認められ、S2614〔原〕が「兇前不覺沾衣濕」とする一方、それ以外の諸本は全て「臂前不覺沾衣濕」に作る。従つて、「兇」は「臂（胸）」の音通または字形の類似による誤りと推定される。

〔三〇〕百過：「過（過）」は量詞（遍・回）、「百過」は「百遍」。「伍子胥變文」（S238）に類似の用例「水底將頭百過窺、波上玉腕（腕か）千廻舉（水底から百回もそつと頭を起こし、波の上から千回も玉のような腕を持ち上げる）」が見られる。

〔三二〕鐵犁耕：地獄の酷刑の一つで、鉄の犁^{すき}で身体を耕すこと。身体

を耕す例と舌を耕す例の両方が確認できる。身体を耕す例として「目連變文」のほか、『經律異相』卷五〇地獄部下「六十四地獄舉因示苦相三」に「四十日耕身。獄鬼以鐵犁耕身。生時耕地傷衆生、惡心稱憎（四十は身体を耕す刑罰という。獄卒は鉄の犁を以てその身を耕す。生きている間に土を耕し〔土の中にいる〕衆生を傷つけて、悪しき心は甚だ憎たらしい）」があり、舌を耕す例には「目連緣起」（P.2193）「受罪之人一日万生万死、或刀山劒樹、或鐵犁耕舌、或洋銅灌口（罪を受ける人は一日のうち、万回も生き返り、万回も死ぬこととなる。或いは刀の山や劒の木に登らされ、或いは鉄の犁で舌を耕され、或いは口に溶けた銅を注がれる）」、『佛說師子月佛本生經』「我見破戒人、墮在泥犁中、鐵犁耕其舌、臥在鐵床上（私が破戒した人を見たところ、地獄に墮とされ、鉄の犁でその舌を耕され、鉄のベットに横たわっていた）」などが見られる。

〔三三〕一向湏臾千過死：「一向」は前出[3]注（三七）「一向子」に述べられているように、ただちに、たちまちのところの意。「湏臾」は本来時間の単位（一昼夜の三十分の一、三十ラヴァ）であるが、転じてたちまちの間、つかの間、しばらくとなる（『広説』。BD00876〔戊〕は「千過」を「千廻」と作る。いずれも「千回」の意。

〔三四〕唱道：前出[7]注（三五）「唱道」では、「耳裏唯聞唱道急」の「唱道」を後世の「喝道」にあたる、先払いの声と解釈した。ここも類似する。獄卒が死んだ人に向かつて「生きかえれ」など何らかの号令または呪文を掛けることを意味するか。

(三四) 一論貴賤与公郷(郷)・・尊い人も卑しい人も、官位の高い人も低い人も関係なく。BD00876(戊)は「一論」を「不論」とするが、S2614

(原)の内容と文意において大きな違いはない。

(三五) 向家・・家の中で。「向」は場所を表す介詞「在(〜で)」に同じ。

(三六) 只得郷岡孝順明 : BD00876(戊)は七字目の「明」を「名」と作る。「明」は「名」の音通による誤りか。

(三七) 瀝酒 : 「暦」、BD00876(戊)が「暦」に作るのは、「瀝」と音が通じることによる誤りか。瀝酒は酒を地面に注いで願をかけることや誓いを立てることをいう。唐の王建「歳晚自感」(『全唐詩』卷三〇〇)に「瀝酒願從今日後、更逢二十度花開(酒を注いで願わくは、今日からさらに二十回、花が咲くことに逢うように)」とある。こゝでは父母の墓に向かつて酒を注ぎ、祝することを指すと思われる。

(三八) 不如抄寫一行經 : 一行の経を写すには及ばない。BD04085(己)はこの句から判読可能。以降の内容はS2614(原)・BD00876(戊)とおおむね一致するが、当該句の最初の二文字「不如」をBD04085(己)のみ「嬢と(お母さん)」とする点が他の二本と異なる。このまま訳すと「お母さんが一行のお経を写す」となり、これがもし誤りでないとするならば、BD04085(己)は他本のような「縦く不如 : (たとえ)であったとしても : するには及ばない」という呼応関係の文脈を構成していなかった可能性が考えられる。

「大目乾連冥間救母變文」訳注(三)

セクション12～19 担当者

- | | |
|----|-------|
| 12 | 井口 千雪 |
| 13 | 大賀 晶子 |
| 14 | 小松 謙 |
| 15 | 井口 千雪 |
| 16 | 大賀 晶子 |
| 17 | 川上 萌実 |
| 18 | 藤田 優子 |
| 19 | 孫 琳浄 |

(二〇一九年十月一日受理)

- | | |
|-----------|--------------------|
| (こまつ けん | 京都府立大学文学部教授) |
| (いのくち ちゆき | 九州大学人文科学研究院講師) |
| (おおが あきこ | 京都大学国際高等教育院非常勤講師) |
| (かつき れいこ | 京都府立大学大学院博士前期課程) |
| (かわかみ めぐみ | 日本学術振興会特別研究員P D) |
| (そん りんじょう | 京都府立大学大学院学術研究員) |
| (たまき なおこ | 京都府立大学大学院学術研究員) |
| (たむら さいこ | 立命館大学言語教育センター嘱託講師) |
| (ふじた ゆうこ | 京都府立大学非常勤講師) |
| (みやもと はるか | 日本学術振興会特別研究員P D) |

(孫)

本訳注は小松が交付を受けている平成三十一年度科学研究費補助金・基盤研究C・課題番号一九K〇〇三七五「全文翻訳と詳細な注釈作成による『水滸伝』の研究」、井口が交付を受けている平成三十一年度科学研究費助成事業・若手研究・課題番号一八K一二三一〇「明代武官を中心とした社会的異種階層間の文学的交流の研究」、川上が交付を受けている平成三十一年度科学研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号一九J〇一九七七「『懷風藻』編纂意図の解明―日本漢文学史の構築に向けて―」、および宮本が交付を受けている平成三十一年度科学研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号一九J〇一九七七「漢籍解釈から見る言語観の確立―日本近世期における唐話学再評価」の成果の一部である。